



Osaka Gakuin University Repository

Title	柳宗悦の「民衆」像 ——建築論の視点から—— Muneyoshi YANAGI's Concept of Folk ——from an architectural point of view——
Author(s)	吉田 正岳 (YOSHIDA SHOGAKU)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第26巻第1・2号 : 51-99
Issue Date	2015.12.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

柳宗悦の「民衆」像 ——建築論の視点から——

吉 田 正 岳

Muneyoshi YANAGI's Concept of Folk ——from an architectural point of view——

YOSHIDA SHOGAKU

ABSTRACT

The word 'mingei' (folk art) is a coined word by Muneyoshi Yanagi, Shoji Hamada and Kanjiro Kawai, who newly discovered the beauty of Japanese 'traditional' folk arts and crafts and drove the 'mingei' movement in Japan.

By the way, the compound word 'mingei' consists of two parts: 'min' (民, folk) and 'gei' (藝, art or craft). 'Min' (民) means 'folk' or 'people' and is also a component of 'minshu-shugi' (民主主義), a socio-political term in Japanese.

We have tended to regard the word 'mingei' as an artificial word, but it is also possible to see 'mingei' from a political standpoint.

Muneyoshi Yanagi has emphasised the Japanese 'traditional' nature of 'mingei'. After World War II, he was heavily criticized as an anti-democrat and conservative.

There are different opinions towards Yanagi's way of thinking although it is important to bear in mind that part of Yanagi's stance is still problematic.

In this paper, let us look at Yanagi's view of 'mingei' from an angle of architectural arguments. Now in Japan we can find

many examples of 'mingei' inspired architecture. What are the characteristics of this style? I will approach this question by comparing 'mingei' style architecture with 'minka' (民家, house) and collective housing.

The research of 'minka' began with Wajiro Kon, and he published the book "House of Japan" in 1922. This was the first book to use the word 'minka'. Similar to the word 'mingei', 'minka' was also a newly coined word.

Both Kon and Yanagi were born in the Meiji era and lived in the same time periods: Meiji, Taisho and Showa era. These eras are remembered for their turbulent social conditions. The connotation of the word 'min' (folk or people) was changed in these eras.

The implications of 'min' changed from a feudalistic meaning to a democratic one.

After World War II, Japan industrialised and achieved high economic growth. This led to a huge increase in workers with many people living in collective housing. We may say that the collective housing is also a house-style of 'min'.

In view of some housing styles, we shall consider the 'mingei' architecture and the meaning of 'min'.

Looking at art from a sociological viewpoint, we can point out the distinctiveness of Yanagi's concept of folk(= 'min'); his theory of 'mingei' is an idealistic one that has weaknesses as well as merits.

□論文構成

1. はじめに	53頁
2. 柳宗悦思想についての研究概観	56頁
3. 柳宗悦の「民藝」論における「民衆」像	58頁
4. 「民衆」像について	66頁
5. 大正期の「民」をめぐる同時性 (synchronicity)	68頁
6. もの作りにおける分岐	80頁
7. 戦後日本社会における「民藝」の位置と意義	83頁
8. 「民衆」から「労働者」、そして「市民」へ	88頁

1. はじめに

もしも、「戦後民主主義と民衆」という課題設定で、柳宗悦の「民衆」観を絡ませて論じるとすれば、ある意味で結論がほぼ見えている。なぜなら「戦後民主主義」を遵奉する立場の人びとからすれば、柳宗悦の「民衆」観は否定すべきものであったからである。

例えば、吉井忠が代表的な論者であるし、出川直樹も柳宗悦の民衆観については同様の議論をたてている。また、戦後には民藝運動の方向をめぐる三宅忠一たちとの対立が起こったが、それらの民藝運動と対立して離反していった人々の主張を考慮するならば、民藝「運動」における「民衆」なるものの理解と民衆が作り出す「美」なるものとの関係をどう理解するかが問題となっていた。

これから先、本稿では以下のような問題設定を背景に置いて論述を進めてゆこう。第二次大戦後において、柳の民藝論における「民衆」観に意義があるとするなら、それは何なのか。

こういう問題を立てたとき、論者によっては「戦後民主主義」と呼ばれる観念と実態、また「民衆」という言葉それ自体に異論を唱えるむきもあるだろう。それは、政治学的に捉えた場合の「民衆」概念について、「民衆＝政治的主体」としてどこまで政治学的概念として使用できるかという問題である。そしてまた、「民衆」という概念を政治学的、歴史的に積

極的な概念として使おうとする人びとの考えと、「民衆的工芸」＝「民藝」でいう「民衆」とはかなりの隔たりがあるではないか、という疑問も生じてくるだろう。ただしその隔たりを認めたくえて、戦後民主主義を支えるとされた「民衆」（≡ 主体、大衆、人民、市民、普通の人びと、市井の人びと）の見方と民藝論での「民衆」観の「落差」を通じて、戦後民主主義の考え方に何らかの再考を促す契機、何らかの視角が見つかる可能性もあるかもしれない。

ところで、「柳宗悦と戦後民主主義」という問題枠組みをいったん設定したうえで、柳宗悦と民藝運動を中心として考えてゆくとすると大きな問題が含まれていることがわかる。「民藝」という言葉は1926（大正15）年に柳宗悦たちによって造られた言葉である。このような「民藝」概念形成の経緯からすると、民主主義的な「民衆」像を前提とした議論は、戦後のある一定時期の問題（「戦後」民主主義の問題）にしかならないおそれがある。それとともに概念上の齟齬をきたすおそれもある。なぜなら柳宗悦の民藝運動は戦前期にすでに展開されていたからである。戦後の柳宗悦の思想的・実践的活動は、戦前の活動の延長線上にあると考えてよい。戦後の柳宗悦の思想は（新しく）仏教美学として展開されたが、それもすでに戦前期にあった仏教への理解と思索の深化として捉えることも可能である。そして戦中期の柳宗悦が政治権力との深い関係にはまり込んだか否かについての微妙な時期を除き、政治権力との関係はおおむね慎重に避けてきたと言ってよい。それゆえにまた、政治的な「戦後民主主義」と柳宗悦の見解を直接に結び付けるのを困難にする。むしろ戦後は保守主義の側に分類されて論じられてきた¹⁾。

また戦後の柳宗悦の思想は、先ほど述べたように、「戦後民主主義」を積極的に主張する立場の政治的・左派的な論者からは批判的にされてきた。それは主に、戦前・戦中の半封建的資本主義社会の日本から、戦後の民主主義社会への転換にあたり、新しい日本をつくりあげてゆく主体像＝戦後民主主義的民衆像を、柳宗悦の思想は提供するものではない、という観点からであった²⁾。

たしかに、戦後の柳宗悦の「民衆」観の「積極性」を、民主主義的立場

からの政治的な社会変革主体を示すものと設定して主張するには、かなりの難点がある。

以下の論述では、戦前の柳宗悦らの「民衆」像の特徴を探り、その対比の上で戦後の民衆論へと接続点を探って行きたい。その場合以下の点に注意していただきたい。

それは、戦前と戦後の思想の流れを接続させるために、また柳宗悦とその他の思想を比較するために、建築論的な視点を媒介させて議論を進めている、という点である。一般的には、柳宗悦の思想を論ずる上で、建築論の論点はそれほど出てこない。日本民藝館やその他の地域の「民藝館」を単独に取り上げる際には、「民藝の」建築として取りあげられる。また「民藝風」の建築も取りあげられる。しかし、それらは「民衆」の建築としては取りあげられていないのではないだろうか。民藝建築 = 「民衆的工藝」の建築と、いわゆる「民衆」の建築 (= 「民家」) との間にはかなりの隔りがあるのではないか。これまで、「工芸」と「建築」は美学のなかで別のジャンルとして意識され論じられてきたことも関係しているのかもしれない。そして「民藝」「民藝建築」「民家」という題材には、民衆の生活空間への、様々な論者の接近方法とも重なる諸問題が介在しているのではないだろうか。このような問題意識から浮き上がってくるものがあるとするとはそれは何だろうか。

以下の論述を進める前に、柳宗悦研究の動向を簡単に眺めたうえで、柳宗悦の「民衆」像の方へと論点を移してゆきたい。

なお以下において、「民藝」「民芸」という二つの表記が出てくる。もともと、「藝」と「芸」(ウン、冠が「艸」「十十」。香草の名)とは異なった漢字であり、異なった意味である。しかし、「芸」(ゲイ、藝の新字体、常用漢字)を「藝」とみなす用字法が広まっており、そのように表記もされているので、柳宗悦の思想や民藝運動に固有の場合は「民藝」を基本的に使うようにするが、論者や書物の記載に応じて「民芸」という表記も用いている。現在は、芸(ウン)と芸(ゲイ)が同一の形で表記されており、混同しやすい。

2. 柳宗悦思想についての研究概観

ここで、本論に関係する文献で、柳宗悦の研究史からいつかの傾向を挙げておく。ただし、戦後の柳宗悦研究を網羅したものではないことに注意していただきたい。またごく最近の研究書は挙げていない。なお、現代の柳宗悦論への接近のための手がかりであるから、飛ばしていただいても構わない。補足文献は注を参照していただきたい。

まずは、戦後の日本思想の観点からの柳宗悦論を挙げておこう。

○久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』岩波新書、1956年11月。この本では、鶴見俊輔が「日本の観念論－白樺派」を書いており、柳宗悦は白樺派のなかでは特殊な位置にあるとしている。「白樺派」についての議論であるから「民衆」には触れていない。

○鶴見俊輔「芸術の発展」、『講座現代芸術』第一巻「芸術とは何か」、勁草書房、1960年7月、所収。のち『限界芸術論』勁草書房、『限界芸術』講談社学術文庫、1976年、に収録。鶴見の議論は、民藝を「限界芸術」の観点からとらえるというユニークなものである。

○久野収・鶴見俊輔・藤田省三『戦後日本の思想』勁草書房、1966年3月。この書物の報告：久野収「日本の保守主義『心』グループ」と三者の対談では、柳宗悦をめぐる久野・鶴見と藤田のあいだで評価の違いがある。

つぎに、民藝についての議論からの文献を挙げておこう。

○吉井忠『民藝論』彰考書院、1947（昭和22）年9月。戦後まもなくの民藝批判として代表的な論考である。

○出川直樹『民芸 理論の崩壊と様式の誕生』新潮社、1988年11月。

○出川直樹『人間復興の工芸 「民芸」を超えて』平凡社ライブラリー、1997年2月。出川の後者の書物は、88年の本を改訂、増補したもの。

そのつぎに、柳宗悦と「民藝運動」に関する文献を挙げる。

○中見眞理「解説」、『柳宗悦 妙好人論集』岩波文庫、1991年2月、所収。中見の「解説」は、柳宗悦の民衆（妙好人）の把握の問題点を指摘している。

○中見眞理『柳宗悦 時代と思想』東京大学出版会、2003年3月。

○中見眞理『柳宗悦——「複合の美」の思想』岩波新書、2013年7月。

○濱田琢司『民芸運動と地域文化』思文閣出版、2006年2月。ここには、三宅忠一論が収められている。

○松井健『柳宗悦と民藝の現在』吉川弘文館、2005年8月。文化人類学的観点からの民藝運動関係者の調査方法に民藝運動のすぐれた特徴を見ている。

民藝「運動」は意見の相違から内部分裂をしてきたし、また戦前と戦後の民藝運動批判者、離脱者、脱落者も多い。

民藝建築についての論考を挙げる。

○藤田治彦、他『民芸運動と建築』淡交社、2012年。この書物は民藝建築様式についてのまとまった調査と考察である。

比較的最近の柳宗悦に関する議論の傾向を紹介しておく。

中見眞理の著作の表現によりながら、参考までに述べておくと、1990年代には「柳宗悦批判の嵐」があった。柄谷行人らの柳宗悦批判、ポストモダンの批判が多く為されたことを念頭においているのであろう。そこでは、主に「近代」（モダン）批判との絡みで柳宗悦批判（＝負の評価、否定的評価）がなされていた³⁾。

2000年代になってからの柳宗悦論は、それ以前の批判とは逆に、柳宗悦の思想に対して正の評価、肯定的評価を与える傾向となっているのが特徴である。また、この肯定的評価というのは、民藝と柳宗理などの産業デザイン、あるいは商業デザインまでも含めての、デザイン論的な評価となっているのが特徴である。

以上においては、柳宗悦論、民藝論に関する主な文献を挙げておいた。本文に挙げた以外の文献については、注4を参考にしていただきたい⁴⁾。

これらを前提としつつ、以下においては、柳宗悦の「民衆」像を建築論的な考察を介して探ってゆこう。

3. 柳宗悦の「民藝」論における「民衆」像

——「民衆」なるものをどう捉えるか、「民衆」の多義性——

戦後民主主義と「民衆」というテーマのもとで、柳宗悦の思想と戦後民主主義とはどのような内在的な関係があるかという課題を探るとなると、それにはいくつかの問題が含まれているのではないだろうか。

まずは一般的に言って、「民主主義」の世の中になったからといって、柳宗悦が唱えるような「美の王国」がただちに到来するわけではない。民主主義はあくまで政治的な制度枠組みである。民主主義制度をとるかぎり、進歩派も保守派もその枠組みで活動する。たしかに美学と政治の関連は否定できない、或る場合には積極的な関連があるけれども、柳にとって理想と見なされる「美の王国」は、政治的枠組みとはまた領域の異なった位相にある。そもそも「民藝」は近代的な政治システムとは異なるレベルの問題設定をおこなっていた。それが「近代」という「社会」において「民藝」を「発見」し、また近代社会において民藝「運動」を行うにあたって、民藝と政治、民藝と近代社会との関連が発生してきた、と考えるべきであろう。柳宗悦は「近代化」の動向に即していなかったからこそ、近代社会の問題を見て取ることができた、と考えられる。「進歩的未來」の称揚はそのまま良きものとはかぎらない。その意味で柳宗悦は保守的であり、懐疑的であった。

柳宗悦は「戦後民主主義」という時代の「進歩」をどのように見ていたのだろうか、また柳はどう見られていたのだろうか。

柳宗悦は保守主義のグループ「心」の一員と見なされていた（久野、鶴見、藤田『戦後日本の思想』勁草書房、1966年、参照）。たしかに柳宗悦は「保守」主義者であり、「伝統」主義者であった。戦後民主主義の遵奉者の側からは、柳の理論の肯定面をどのように捉えればいいのか。そのヒントの一つは戦後民主主義の思想家と言える鶴見俊輔がなぜ柳宗悦にシンパシーを感じ彼を論じたのか、そのあたりにあるのではないだろうか。上記の研究史の拡がりのなかから一筋の水流が見つければと考えている。

以下の議論では、「戦後日本の民衆と思想」、あるいは「戦後民主主義と民衆」という伴走的テーマを側面に見遣りながら「民藝」なるものについて考察していこう。

「民藝」という言葉は、「民衆の工藝」を縮めたものと言われている。「民衆の工藝」という言葉は柳宗悦たちによって1926（大正15）年につくられた造語である。ところで、戦後民主主義で言う「民衆」と民藝で言う「民衆」は同じものであろうか？ 言葉は同じ民衆であっても違った言葉の内容を意味しているのではないだろうか？ 誰しもこのような疑問を抱くであろう。

戦後民主主義と言うとき考えられている民衆像は、天皇制国家主義の下での「臣民」像ではなく、第二次大戦後の新しい社会、新しい日本国家をつくりあげる「民衆」像であった。それは近代的主体、開明的主体、啓蒙的主体であり、社会主義的思想を持つ人たちからは「人民」とも、「階級的主体」とも呼ばれるような「民衆」であった。そのような「民衆」像こそが、戦後民主主義における理想型（理念型）とされていた。

戦後の社会科学の分野では、ほとんどの学者が戦前とは異なる「新興」日本の「人間類型」を求めた。代表的な学者としては、政治学分野での丸山眞男、西洋経済史の大塚久雄など枚挙にいとまがない。大塚久雄の著作ではM. ヴェーバーに立脚した新しい人間像（人間類型）の描出が試みられていた。ヴェーバーを使うかどうかは別にして、「臣民＝民衆」とは異なる「新しい国民主体＝民衆」像の構築を誰しもが主張していた。

他方、柳宗悦の民藝論における「民衆」とは、民藝品（＝妙好品）を通して、その背後に「民衆」を見ることができるといえるような民衆である。民藝理論では、民藝品（＝妙好品）をつくりだす民衆をいわば「典型」としていたように思われる⁵⁾。

宗教美学の理論的観点からするならば、民藝品が現に存在するならば、たとえそれが過去であれ、現在であれ、時代はひとまず問わなくてもよい。近世でも近代であっても「民藝品」を作り出すほどの民衆ならば、「民衆」なのである。かくして民衆像に美的視点・宗教的視点（＝価値視点）が介入していることが柳宗悦の理論の特徴である。価値的視点は時代、歴

史的時間を超える側面がある。また後年の柳宗悦は、民藝品を妙好品とも言いかえているように、彼の「仏教美学」の観点からの民藝品評価と民藝を作りだす民衆への観点を強く打ち出してくる。

ただし、近代市民社会の人間像の探究などと言う場合も、或る意味で価値視点（＝歴史段階的視点）が介入しており、社会的存在としての人間をあつかう場合には、柳宗悦の「民衆」評価も社会科学的な「方法」論と「価値観の介入」という方法そのものにおいてはそれほど懸け離れているわけではない。とは言うものの、双方の「民衆」像は相当懸け離れているようにも見える。宗教的＝価値的視点からの方法論はさておき、「民藝品」と「民衆像」に戻ろう。

さきほど、時代は問わないと言ったが、民藝品が多く産出された時代があったこともたしかである。それは江戸時代である。そうすると柳宗悦の「民衆」像は、典型的には江戸時代の民衆像が当てはまるのではないだろうか⁶⁾。

たしかに、彼が蒐集した民藝品は、江戸時代のものが多い。新作民藝作家（河井寛次郎、濱田庄司など）も、過去の民藝品に範をとって制作しているところがある。したがって、旧作、新作を問わず、民藝には類似した作品を見出すことができる。

「民藝」観念の成立の歴史的事情・背景を指摘しているのが、さきほど注に挙げた岡村吉右衛門『柳宗悦と初期民藝運動』である。江戸時代は、戦国時代が終わり、各藩の「地域」が固定的になった時代である。また、丸山眞男は江戸時代について、論文「開国」（『忠誠と反逆』筑摩書房、1992年、所収）で、「徳川幕藩体制は、〈領主分国制〉をスタティックに凍結したもの」である、と述べている。江戸時代の幕藩体制とは、強大な徳川幕府が支配的位置にあったが、各藩には領国に対する支配権の自立性があり、各藩の地域内での自給自足経済を基本としていた。江戸時代は、それら各藩の地域内経済の範囲でモノが作られ消費される傾向が強まったのである。それとともに、藩の財政上の強化や立て直しなどの課題に合わせて、新田開発や商品経済に適合的な作物を奨励したりした。宇和島藩、福井藩、米沢藩などの多くの藩では、上記のような産業政策、財政政策の関

係もあって、藩独自の産品を生み出し、各地の他藩との関係、また大坂での取引を通じて商品経済の発達を遂げていった。岡村吉右衛門の著作には、いかに江戸時代の政治的・地域的な配置との関連で、各地の産品が地理的に現代にまで及んでいるを図示し、解説している。民藝品が地域の「風土」を反映していると言われる歴史的・地理的な理由がわかる⁷⁾。

また近代以前の社会の人々は、現代の消費社会と異なり、広域的な流通業に（今日ではグローバルな流通に）生活を依存させながら、生活物資のほとんど全てを購入して済ませるといこともなかった。そのような時代に、主に農民たちが、そして工人たちが作りだしたモノを「民藝品」として柳宗悦たちは「発見」した。そして明治時代に入ってから第二次大戦後までは、日本には農村社会の趣きが色濃く残っていた。それゆえに、各地の江戸時代からの手仕事は衰退しながらも柳宗悦が生きていた時代には今日から見ればまだなお残存していたのである。民藝品は各地の「風土」に密着した産品であるとともに、その後の資本主義の発展とともに「遅れた」地域を指す記号としても作用することにもなっていく⁸⁾。

このように500年ほどの歴史的なパースペクティブをもって、現代の「民衆」と民藝で言う「民衆」像の対比をおこなうならば、言葉は同じではあったとしても、第二次大戦後の日本社会における「戦後民主主義」の「民衆」像（短期的視点）と民藝の「民衆」像（長期的視点）の間には最初からズレがあることがわかる。そのズレのものは、一方では戦後の日本社会に生きる「民衆」は、高度経済成長の過程で典型的にあらわれる経済的な私的欲望に立脚する民衆像（社会学的典型像としては「私生活主義的市民」像）であり、他方民藝における「民衆」像とは戦前期の日本社会、さらには封建制期の日本社会における民衆像を典型とすることから由来する。したがって、戦後民主主義思想の立場からすると、柳宗悦たちが発見した「民藝」における「民衆」像は、現代社会における典型像として押し出すには無理があり、そもそも民藝的民衆に意味があるのか、という問いかけとなるのも当然だろう。確かに柳宗悦たちが見出した民藝品は美しい。しかし民藝品をつくり出す民衆の生活は改善されねばならない。柳宗悦は悲惨な農民の生活に目を向けていない。このような批判をしたのが吉井忠

や出川直樹である。柳宗悦が見出した民藝品の美は美として認め、その全否定はしない、しかしながら民藝を産み出したとされる民衆の貧しい生活を柳宗悦は無視している、というのが批判の基調である。

たしかに柳宗悦は目に文字のない民衆や無名の工人が、素晴らしい工藝品を産み出したと語っている。第二次大戦後の日本にも文字が読めない人は少数ながらまだ存在したから、柳の語ることは事実でもあった。しかし、識字は民衆の生活向上には欠かせないものであった。過去の無知な民衆が民藝の美を生み出したと讃美する柳宗悦の理論は、民衆を無知、無学、貧困の生活のままに閉じ込めようとするものであるとされたのである。同様の論理は柳宗悦たちが関わった「沖縄方言論争」でも展開された。日本の「近代化」の歴史的過程そのものの社会学的評価と、沖縄の事例のような地域アイデンティティと「日本」との統合、離反、占領をめぐる葛藤とは異なったレベルでの扱いが必要ではあろうが、民衆の生活レベルの向上は批判の余地のない前提とされた。

ところで、柳宗悦について、このような議論が本格的になされるようになったのは第二次大戦後のことのように思われる。戦前期、ことに1930年代においては、社会科学的観点から民藝とその運動を社会的生産力の増強と結び付けるのは困難であったし、ましてや民衆の政治的運動を「民主主義」的観点から取りあげることは、どのような運動であれ、運動そのもの前途を危うくするものであったからである。吉野作造は民主主義という用語を用いることができず、「民本主義」という用語で彼の理論を展開したという言い方がされ、その見解が通用していることから政治的な力を推測できよう。吉野作造は、じつは、「民本主義」に君主、共和の両政体に通ずる積極的な意味を持たせていたのである。

とは言え、明治時代の中ごろから、そして大正期から昭和初期にかけては、社会主義思想の広まり、労働運動の伸展、民本主義思想の鼓吹など受けて、「民衆」という用語にそれぞれの思想傾向からの意味を込めて使われるようになっていた。

——民衆という用語の拡がり——

つぎに「民衆」という用語の一般的な拡がりについて触れておこう。

「民藝」（＝民衆的工藝）の名づけの経緯の背景には「民衆」という言葉の流行があったことは確かである。柳宗悦はまた大杉栄らの「民衆芸術論」についても承知していたであろう。柳とアナーキズムとの親近性も窺える。クロボトキンの書物を読み、彼への親近性について書いてもいる。それは、クロボトキンに直接面会もした有島武郎を通じての影響が大きかったであろう。但し、両者（柳、有島）とも思想検閲を忌避して多くを表記していない。このような見方とともに、民藝において「民衆」の言葉が使用される関係については、中見真理『柳宗悦－時代と思想』東京大学出版会、第七章「民衆芸術論の抬頭と民芸運動の性格」に詳しい。また中見は、柳宗悦が「当初『下手物』という言葉を使用していたが、民衆芸術論がさかんに説かれる思潮のなかで、それを『民芸』に改めている」とも述べている⁹⁾。そして、「民衆芸術」論が盛んなとき柳宗悦は「民衆」の用語を意識的に避けていたふしがある、とも述べている。政治運動的な用語法との距離を測って慎重になっていたのではないだろうか。

——民藝の「藝」——

民藝の「藝」に着目するならば、「工藝」の位置をめぐる問題がある。

そこで民藝＝「民衆」的工藝と「純粹」工芸との対立的関係について見ておこう。明治以降の美術界では、純粹美術（絵画、彫刻）に対して工芸は一段低く見られていた。工芸界にとっては、工芸の美術界での地位の確立が問題とされていた。そこで美術的な工芸を目指す動きが出てくる。これに対して民藝は「用の美」を掲げ、「美術家」の工芸ではなく、「民衆」の工芸の価値を称揚した。このような美術「界」（champ）[P. Bourdieu]をめぐる対立のなかで、民藝は工芸に対して「民衆」という別の方面からの価値評価を投入したとも言えるだろう。

明治時代以降の美術と工芸の対立については、佐藤道信、土田真紀の著作に詳しい¹⁰⁾。

——柳宗悦の時代への対応——

民藝における民衆像（江戸時代中心）と民藝の名づけの経緯（美術と工藝の対立）がこのようなものであったとしても、大正、昭和の時代においては、また別の意味づけがなされることになる。大正デモクラシーの時代、昭和初期の時代、世界大恐慌から「満州事変」「支那事変」を通過しての軍国主義の時代、戦後の時代において、それぞれ民藝に対する意味づけは少しずつ変容しているのではないか。

柳宗悦の思想と行動に即してみると、大正デモクラシーの時代には、日本的美の「発見」（木喰仏の発見・蒐集）、昭和初期には日本的美の探索（民藝品の蒐集）、大恐慌から軍国主義が強まっていった時代には民藝的美学の確立と保全、戦後においてはアメリカ文化の流入に対して伝統文化の擁護、仏教美学の確立を柳は目指していったと言えよう。柳宗悦は戦後に自らの思想的歩みを振り返って「仏教に帰る」（1955年）を著しており、そこで思想的重点の置き方の変遷を語っている¹¹⁾。

これら試みを通じてみられる民衆像は、直接的には労働者階級としての民衆像ではない。労働者の存在は基本的には資本主義社会において成り立つものであって、労働者は労働力商品として資本主義社会のメカニズムのなかで働き、モノを作り、流通させ、賃金を得て生活する。労働者とその家族は、労働者＝生産者のみならず、労働者も含めて生活の場における家族＝「消費者」となる。

柳宗悦が考え評価する民藝品は、基本的には彼がとらえている資本主義的・機械生産とは相容れないものであった。（柳は機械生産そのものを否定しているわけではないが。）そうすると民藝品を作り出す民衆とは、資本主義のメカニズムとは異なる地平からモノを作る民衆として設定されることになる。また、柳宗悦の見出した民藝品は江戸時代のもが多く、それらは資本主義社会の機構から産出されたものではない。民藝を産み出す「民衆」像は、複数の時代の社会、文化を貫いて存在するレベルから発想されているのである。つまりどれか単一の社会形態には還元できないような「民衆」像と言えるであろう。

とはいえ、柳宗悦たちが生きているのは明治以降の資本主義社会であ

る。その社会のなかから生み出される醜いモノに抗うにはどうすれば良いかという問題設定をはずすことは柳には出来なかった。この問題設定はイギリスのウィリアム・モリスとも共通していた。そして柳は、ギルド社会主義への共感、クロボトキンの相互補助（相互扶助）への共感、戦後は社会党への共感をも示していた。資本主義社会の機構には同調はしなかったし、柳の民藝理論の組み立てから言っても完全に同調はできなかったであろう。そうかと言って、社会主義、共産主義の方向にも、その産業主義的な社会的基調のゆえに同意はできなかったであろう。柳は民藝の成り立ちを生産諸力の糾合、発展のうちに、そしてその発展の行く末に民藝の新展開を期待するというような発想はしていなかったであろうからである。

—— 柳宗悦の思想と社会理論との関係 ——

このように、戦前・戦後における社会発展を期待せんとするような理論には、柳宗悦は共感しなかったであろう。そのことは、柳の民藝論と理論的にはどういう関連があるのだろうか。社会主義、共産主義の理論においては、労働者階級は資本主義社会の機構のなかから資本主義の墓堀人として登場し、資本主義的な諸関係を打ち破り、社会主義社会へと移行するという弁証法が唱えられる。このマルクスが唱えた弁証法の実現のためには、資本主義社会で蓄積された大規模な生産諸力が社会主義社会の実現に至って解放され、人民の搾取が根絶されると想定されている。しかし柳宗悦の理論的観点からすれば、生産力を支える機械的・大工業的生産のなかからは、民藝のような美的なものは生み出されにくい。柳宗悦は機械生産による民藝の可能性は否定してはいないものの、実質上そのようなことはほとんど不可能だと考えたのではないだろうか。柳宗悦は手の技を強調するように、民藝の美を身体的感覚と結び付けて理解していた。手の技の持ち主が、たとえばテーラー主義的な労働分割（企業内分業）により、民藝美を生み出すなどということは考えられないことであっただろう。ここで柳宗悦の思想を持ち出すまでもなく、テーラー主義的労働分割はチャップリンが「モダン・タイムス」で戯画的に描き出したような労働者の疎外形態を引き起こす。

資本主義的機械制生産における生産力と民藝との関係については分業、協業の分析が不可欠である。分業や協業と民藝との関係については、かつて拙稿で言及したのでここでは論究を避けたい。拙稿では、芹沢銈介の事例を介した分業の分析を行っているので参考にされたい¹²⁾。

ここでしばらくのあいだ、「民」についての議論を別の方向に転じよう。

4. 「民衆」像について

——「民」と「衆」の字義——

ここからしばらく議論の方向を変えて、漢字における「民」と「衆」についての基本的な意味（原義）を瞥見しておくことにする。現在、「民衆」という言葉を使うにしても、同義ではないにしろ、元の意味のなにほどかが投影されていると考えるからである。

まずは「民」の字義について。

「民」という字には、民衆、暗い、おろか、という意味がある。また解字は、象形で片目を針で刺した形にかたどり、片目をつぶされた奴隷・被支配民族の意味から、「たみ」の意味を表す（『新漢語林』）、とある。

また『詩経』大雅・烝民には、「天生烝民」の言葉がある。海音寺潮五郎は「天 衆民を世に生じた」と訳している（海音寺潮五郎訳『詩経』中公文庫、1990年、571頁）。烝（ショウ）は、蒸す、もろもろ（衆）、多い、という意味である。

漢語における「民」の元の意味は、このようなものであろう。多くの人びとを指し、決して上層ではなく、下層の人びと、支配される側の人びとを指して「民」という。

和語では、「たみ」は「田身」の意。治められているもの、被治者、人民の意味である。「そを取ると騒ぐみ〔御〕民も家忘れ」（『万葉集』、一・五〇。「藤原宮の役〔えだち：夫役〕の民の作れる歌」（『新潮国語辞典』）。また『大言海』では、「田部」の転としている。「民」（漢音：ピン、呉音：ミン）に「たみ」を当てたのだが、基本は被治者を意味していることがわかる。

つぎに「衆」の字義について。

「衆」は「おおい」。寡に対す。老子に「殺人之衆、以悲哀泣之」(人を殺すこと衆[おお]ければ、悲哀を以て之に泣[のぞ]み)とある(『老子』第三十一章、蜂屋邦夫訳注、岩波文庫)。「衆」には他に、「多くの人、民、庶民、家来、群臣」の意がある。

『論語』(衛霊公第十五、二八)に、「子曰、衆悪之必察焉、衆好之必察焉」(「衆これを悪むも必ず察し、衆これを好むも必ず察す」。「察す」は「調べてみる」という意)とある。ここでの「衆」は「大勢」という意味である。

国字では、下級武士、下級僧、複数の人に対する敬称：「皆の衆」を意味する用法がある。

「衆」の解字：(会意) 甲骨文では、「日」+「イイ人」。日は村落の意味。「イイ人」は多くの人の意味。村落に集まる多くの人。日は金文から目となり、のちにまた、血に変形した。「衆」=「眾」(部首はよんがしら。本字)(『新漢語林』)。

上記からわかるとおり、「民」にしても「衆」にしても、社会のなかの上下関係、支配者と被支配者関係を表しており、下の者、被支配者が多数であったことを表している。

日本の明治期には「民」は多用された。四民平等の世の中となり「平民」、「人民」、「民権」の如くである。そのうち「民権」は、「人民の権利、人民が政治に参加する権利」であって、周知のように明治の初期には「自由民権運動」があった。

福沢諭吉『文明論の概略』第2章には「王室の虚威を減少して民権を興起し」(岩波文庫、53頁)とある。また同書第10章には「民権興起の粗暴論は、立君治国のために大に害あるが如くなれども、人民卑屈の旧悪習を一掃するの術に用うれば、また甚だ便利なり」(岩波文庫、303頁)とある。

植木枝盛の「民権自由論」では「民権を張らざれば国権を張り独立を保つ能わず」とある(『植木枝盛選集』岩波文庫、39頁)。植木の場合、民権論は国権論とは必ずや背反するものではない。

ここで古代ギリシアのデモクラシーとの対比をしておくと、古代ギリシ

アの市民デモクラシーは基本的には統治者のデモクラシーであり、統治者たる市民の共同決定を意味していた。古代ギリシアでは市民は被治者との対比される位置にあった。そこからすると、日本における民衆の意味は、東洋の伝統を引きずっているのではなかろうか。日本で民主主義を主張するときは、ほとんどの場合、統治される側からの主張や発言を意味することが多いように思われる。

5. 大正期の「民」をめぐる同時性 (synchronicity)

——「民衆」という言葉の「民」の概念について——

ここで、建築学の観点から、大正期における「民衆」という言葉の使用について見ておこう。藤田治彦、他『民芸運動と建築』(淡交社、2012年)が「民家」と「民芸建築」の関連から「民」の概念に言及しており、参考になる。藤田は「序論 民芸運動と建築」で三つの「民」の芸術を取りあげている。「民家」「民芸」「民具」がそれである。これを「民衆の芸術」(Art of the people)としている。民藝運動がイギリスのウィリアム・モリスのアーツ・アンド・クラフツ運動からの影響が指摘されているように、いずれの芸術運動も近代の資本主義社会に対する反省とともにあった。柳宗悦は民藝運動がアーツ・アンド・クラフツ運動からの影響と言われるのを嫌ったが、その影響は否定できない。また柳宗悦ならば「民藝」と「民具」とは区別するはずであるが、そのことについてもひとまず考察の対象の外におこう。

——大正時代における「民家」という意味について——

つぎに、大正時代における「民」の意味について、「民家」という用語に即して見ておこう。この「民家」の考察は上記の藤田治彦の論考を参考にした(藤田、他『民芸運動と建築』淡交社、所収)。

「民家」という言葉は、今日どのような意味に理解されるであろうか。おそらく民(人びと)の建築物というような意味で理解されるであろう。しかし、大正期に至るまで「民家」は、「武家」に対する「民家」(=「百

姓+町人) という意味で使われていた。ここには「民」が身分制の理解を引きずった上下関係で理解されていたのである。このことについては、藤田治彦の論考が、「民家」という言葉の用法は武士階層の家に対しての民の家という、身分制による理解のもとにあったと、興味深い議論を展開している。現在でも「武家屋敷」や「商家」といえば、それなりの家の様式・形式をもって理解するが、それらの様式・形式をもって家を建て、住まうことが、各人の社会的地位に応じた規制力をもつとは考えていない。

—— 「民家」研究のはじまり ——

「民家」研究が組織的に始まったのは1917(大正6)年である。他方、「民具」研究につながる渋沢敬三のアチック・ミュージアムは1921(大正10)年に始まる。

民家研究は「白茅会」の活動を経て、1922(大正11)年に今和次郎『日本の民家』(初版)が出版されたことが画期となった。今和次郎が『日本の民家』(初版)を出版したあとに「民家」という呼称が一般化した。

これらの流れをつくった源流に、新渡戸稲造の「地方学」(じかたがく)がある。そこには、柳田國男、今和次郎も参加していた。そこから「郷土会」、『郷土研究』も育っていった。ただし、「郷土会」も「白茅会」も数年で会としての活動は停止していった。中心人物であった新渡戸、柳田が海外での仕事に赴いたからである。しかし、そこに集まっていた人びとはそれぞれの関心と人脈を保ちながら、日本の民衆に関する研究・調査は続けられていった。また柳田國雄はその後も自身の学問的関心を継続し、いわゆる「日本民俗学」の流れはここから形成されていったのである。

柳田國雄の民俗学とは別に、今和次郎は『日本の民家』(鈴木書店、1922年)を出版し、その後も日本全国の民家採集を継続し、戦後に『日本の民家』(相模書房、増訂版=第四版、1970年)を出版することからもわかるように「民」の家屋の調査(採集)、研究を積み重ねていった。ただし、今和次郎の「民家」は、後に述べる「民芸建築」とは違い、採集したほとんどが普通の民家、民衆のつくる典型的な民家、名も無い民家であった。初版の段階で「採集」された民家のうち、のちに文化財として登録さ

れたものは一軒もなく、戦後の第四版に至るまでに採集された民家のうち一軒だけが文化財に登録されたという。この意味で今和次郎が採集した民家は「どこにでもあるような民家」という意味で典型的な「民の家」だった。「民家」という言葉は、今和次郎の書物から広がっていったと言えるが、1922（大正11）年の段階で今和次郎の「民家」概念が確定したのではなく、戦後にいたるまで調査し、書物の補訂を重ねていったことから推測できるように、「民家」概念の基本は保ちつつもより広く採集を試み、その概念を深めていった経緯が窺える。

なお、地方学、郷土会、白茅会の活動と連動して重要であると考えられるのは、石黒忠篤の存在である。石黒は戦前期の農商務省にあって、日本の農政の中心人物であった。石黒の示唆、援助もあって、今和次郎の戦前期の調査が継続された側面がある。今の「民家」調査は見事に「普通の」民家の調査であり、全国および朝鮮の多くの民家調査（採集）をしたのだが、先に述べたように重要文化財、登録文化財級の民家は一軒を除きなかった。したがって、今となっては跡形もなくなっている民家も多い。それは何を意味するかと言えば、今和次郎の調査はいわゆる美的観点、そして文化財的な観点からの民家調査ではなかったということである。農山村漁民の生活と家屋の関係、柳田國男の言葉を使うならば「常民」の生活の実態と民家の建築空間の関係を調べるのが今和次郎の主眼とするところであった。それはまた石黒忠篤が今和次郎に農村調査を依頼した時代背景には小作争議が頻繁に起こっていたということとも無縁ではない。石黒は今に条件をつけず、ただ農村の実態を見てこいと言ったという。

つぎに、民芸建築なるものに移ろう。そもそも「民芸」建築とは如何なるものであろうか。（以下、藤田、他の著作名にしたがって「民芸」の表記も用いる。）

「民芸建築」と呼ぶことができる建物はかなり造られた。しかし、藤田が指摘しているように、柳宗悦には建築についての文章はそれほど多くない。

柳の建築に関する文章や実践をいくつか挙げると、まず朝鮮の景福宮光化門の取り壊しに反対して、1922（大正11）年、「失はれんとする一朝鮮

建築の為に」を發表した。

1928(昭和3)年、上野で開催された大礼記念国産振興東京博覧会に「民藝館」を出品した(後の「三国荘」)。これには工政会常務理事・倉橋藤治郎の後押しがあった。

柳宗悦の「民藝館に就いて」(1928年)では、「これは他の一切の出品物と異なり、家屋及び家具の総合的展覧である」、「工藝は常に家屋と結合されねばならない」、「元来建築は総合的工藝でなければならず」と述べている。これらの言葉に見られるように民藝館は理想的な工藝と結び付いたものでなければならなかった。「民藝館」のその後については、「三国荘小史」(『工藝』60号、1936年)に記載されている。上野の博覧会に出品された「民芸館」は、山本為三郎が購入し、大阪三国に移築したことをもって「三国荘」と名付けられた。

『工藝』第二号(1931年)に「臺所」(『柳宗悦全集』第十一卷)を書き、第三十五号(1933年)を民家特集的な号とした。

また、1936(昭和11)年の日本民藝館の建設には、柳宗悦は設計にも積極的に関わっている。駒場の民藝館の建築費用は大原孫三郎が前年の1935(昭和10)年に十万円を寄付した。また駒場の民藝館の設計、民芸風建築については横山貞子の分析がある(横山貞子「民芸風建築の未来」、『日用品としての芸術』晶文社、1979年、所収)。

朝鮮総督府庁舎建設にともなう光化門の解体に柳宗悦が反対したことは良く知られているが、『日本の民家』を書いた今和次郎も「総督府新廳舎は露骨すぎる」(『朝鮮と建築』第貳輯第四號、1923年6月)と反対した。ここから滝沢真弓(分離派、「建築は自然を離れる」、純粹美の追求)との論争となる。

今和次郎が朝鮮の建築について言及したのは、1922年5月に『日本の民家』初版を出版したあと、8月1日から、朝鮮総督府の委嘱により朝鮮の農村家屋の調査をしていたからでもある。このことから、総督府の新庁舎と光化門との位置関係はよく知っており、旧王宮の建築物との関係では「露骨すぎる」という表現になったのであろう。

藤田治彦は上記論考「民芸運動と建築」の結論部分において、柳宗悦と

今和次郎の建築の思想を環境（自然）との関係で捉えていたという点で、日本建築論では画期的なものとしている。ただし、「環境」という概念が今日使われような意味で、その当時の日本にあったかどうかは不明である。

20世紀のはじめにユクスキュルが環境概念を提出していた。彼の『動物の環境世界と内的世界』は1909年刊である。今和次郎には遷移の観念はある。1917（大正6）年、「都市改造の根本義」を今和次郎は発表しているが、そこにはゲデスの概念を使った都市生態学の考えが見られるとされている。シカゴ学派（社会学）のパークとバージェスの『都市』は1925年刊。パークの論文「人間生態学」（human ecology）が出たのが1936年。パークはこの中で遷移（succession）の概念をつかって都市構造の分析を行っている。

このような見方からすると、今和次郎の都市を生態学的に見る視点は、世界的に相当早い時期のものであると見なすことができよう。

都市開発との関連で「環境」概念を使用したのは浅田孝である。彼は1961（昭和36）年に「環境開発センター」を設立した。浅田の使う「環境」には梅棹忠夫の生態史観の影響もあると言われている（笹原克『浅田孝』オーム社、2014年）。第二次大戦後においても「環境」という概念はたいへん目新しいものであったようだ。この点では、今日使うような意味での「環境」を過去へと投入するときには注意しなければならない。

——田園都市構想——

大正年間の建築史からは田園都市構想を取りあげざるを得ない。大正年間は都市と農村の関係が建築学でも問い直された時代であった。この田園都市構想を生活と労働の関係の視点を基本において見直してみよう。

日本の「田園都市」は、イギリスの田園都市構想を見習ってつくられた。

1916（大正5）年に中條精一郎はレッチワースを視察している。1918（大正7）年、田園都市株式会社がつくられ、田園調布の開発に着手した。1922（大正11）年、大阪の千里山住宅分譲開始。このあと田園調布の分譲開始。1922（大正11）年9月、桜ヶ丘住宅博覧会と続く¹³。西山卯三の『大正「住宅改造博覧会」の夢』には、桜ヶ丘住宅はかつては15棟残っ

ていたが、13棟現存すると書かれている。現在、桜ヶ丘には10棟程度現存しているようである。当時の民家で一般的に使われていた井戸ではなく、水道、水洗トイレなど近代的設備がしつらえてあり、展示物の住宅がそのまま売りにだされた。大阪におけるこのような展示と販売方法は東京での住宅博覧会との違いのようだ。

千里山住宅が分譲開始された1922（大正11）年は、柳宗悦が光化門の取り壊し反対の文章を新聞に載せた年でもある。光化門はソウルの王宮の正面に建っている建築物である。その取り壊し反対の意味は、日本の植民地政策とそれを押し進める朝鮮総督府の施策に対する反対表明であったことは、柳の文章を読めば明白である。

だが他面では、「民」「民衆」「民家」「民芸館」という明治から大正にかけての「民」と建築文化に関する観念の有様をみると、建築物を生活のあり方と結び付けて理解しようとする日本近代の思想の流れと無縁ではないことが推測できる¹⁴⁾。民藝運動が日本社会の近代化のなかからでてきたように、建築空間の場合はその本性上、社会空間、生活空間と密接に関連させて捉えなければならない。柳宗悦の場合には、植民地統治下であった「朝鮮」の社会空間、生活空間における美の独自性という観点からの反対ということでもあった。柳の「朝鮮民族」の美の独自性を主張すること自体が政治的な意味合いを帯びてもいた。したがって美的評価、美学的評価が政治ではない、あるは政治的観点を覆い隠すものであるというような見解は速断にすぎるといえるであろう。

今和次郎の場合においてはなおさら、「建築」と「生活」を結合させる視点を自覚していたように思われる。今は、『日本の民家』に見られるように、たんに建築を美術建築家の観点からのみは見えていなかったからである。民家を通じて、民衆の「生活」のあり方をみていた。それは大正期の農村において小作争議が頻発し、農民の生活そのものが「住居」を通じて現れているという視点を今が有していたからである。先に石黒忠篤との関係に言及したが、農商務省主体での『小作慣行調査』との広い意味での連繫も今和次郎の民家調査にみて取れるのではないだろうか。1947（昭和22）年の農地改革の以前では、小作地の比率は47%あり、収穫の1/3から

1/2の高率の現物納だった¹⁵⁾。戦前期日本の農村の問題は、まさしく「民」の問題でもあった。戦前期の「民家」調査の意義は日本社会の構造的問題性に位置づけて捉えられるべきものだろう。

近代の日本社会では、一方では上記のような農村の劣悪な状況が存在していたのだが、他方では明治期以降の資本主義の発達とともに、労働者の数も増え、都市の人口も増え、都市での生活状態の劣悪化をも招いていた。都市での生活者はより良い生活環境を求め、より良い住宅を確保したいと願うようになっていった。

大正期はまた日本の都市中心部の環境劣化にともなう避難先としての郊外住宅開発が進んだ時代であった。すでに明治期末に、阪急の小林一三は電鉄会社による郊外住宅開発を日本で最初に手がけ、東京では東急（「大東急」）が阪急の郊外開発と電鉄経営のセットという方法に追随した。中産階級のサラリーマンは、郊外に土地を買い、洋風や和洋折衷の住宅を建てた。

1909（明治42）年、阪急の前身である箕面電車は「空暗き煙の都」から「田園趣味の模範的郊外生活」へという「池田新市街地」の広告を出している¹⁶⁾。

第一次大戦後の大正期は「生活改善運動」がおり、洋風の生活様式を取り入れようとする風潮が強まった。1920（大正9）年には、「生活改善同盟会」（佐野利器、他）が結成され、畳から椅子への生活を推奨した。

住宅改善運動には、「住宅改良会」（大正五年設立）、「日本建築協会」（大正六年設立）、先ほどの「生活改善同盟会」の三団体が関わっている。

また都市計画法、市街地建築物法制定運動が起こったのもこの時期である。関西では日本建築協会の片岡安がこの方面で活躍した。

中産階級向けの集合住宅も大正期には計画され、建設されるようになった。集合住宅の早期の事例としては、三菱一丁倫敦6・7号館（日本初のテラスハウス）が1904（明治37）年、1916（大正5）年に軍艦島30号館（日本初の鉄筋コンクリート〔RC〕造り集合住宅）、1921（大正10）年に横浜市営中村町第一共同住宅館（日本初の鉄筋ブロック造り集合住宅）、1923（大正12）年に東京市営古石場住宅（東京初の鉄筋ブロック造り集合

住宅)と集合住宅の建設が続き、1923(大正12)年の関東大震災のあとをうけて、1924(大正13)年に財団法人同潤会が創設され、1926(昭和元)年以降、同潤会アパートが次々と建設されてゆく。また、日本初のエレベーター付き集合住宅である御茶の水文化アパートがヴォーリズ的设计で1925(大正14)年に建設されている。

エレベーターは鉄筋コンクリート〔RC〕造りと合わせて、建築物の高層化に寄与した。エレベーターは1871年のシカゴ大火の少し前に発明された技術である。1856年、ニューヨークにエレベーター付きのビルが建設された(ハウアルト・ビル)。シカゴは大火のあと、エレベーターと鉄骨技術でもって高層ビルを建てるのが可能であり、シカゴ派と呼ばれる高層建築が続々と建てられた(19世紀末)。ニューヨークでは1920年代、30年代に高層ビルが建てられる¹⁷⁾。

日本では地震に対処しなければならず、すぐさまアメリカのような高層建築が建てられたわけではないが、都市人口の稠密化に対して、建築の高層化の方向で解決をはかるといふ志向は、モダニズム建築(近代建築)の建築家、都市計画家のあいだでは共有される理想であった。たとえば大阪万博会場を設計した西山卯三、丹下健三の二人とも、都市プランナーとして京都の高層化計画(京都計画1964)、東京の高層化計画(東京計画1960)を提案している。

都市化の現象に対しては、郊外地の個人住宅・団地だけではなく、近代的な集合住宅でもって、しかも高層化でもって、近代日本社会の民「衆」化に対応してゆこうとするのである。この方向は、その戦後日本に展開される団地、ニュータウンのあり方を考える際に重要な視点となるだろう。

明治10年代以降の10年間だけでも、東京、大阪では50%の人口増加があった。都市の周辺ではスプロール化が広がった。また居住区の劣悪化による伝染病の流行もあった。大阪では1903(明治36)年、内国勸業博覧会が天王寺村で開催された。明治30年代半ばの頃である。まだ天王寺が「村」と呼ばれていたことから推測できるように、当時の大阪南部の地図を見ると、天王寺の南方は田畑が広がり、田園の様相を色濃く見せている地域であった。博覧会の開催とともに都市の拡大が図られたのである。大

正期の住宅改善運動、そして田園都市構想も、この明治時代からの都市の拡大と都市の諸問題への反省と改善への意欲に基づいている。

ところで、イギリスの田園都市と日本のそれとは大きな違いがある。日本の「田園都市」には働く場所がない。これがイギリスの田園都市（E.ハワードの構想）との決定的な違いである。イギリスの田園都市には働く場所、工場も配置され、職住接近が図られた。日本の郊外住宅地は、都心への「通勤」を前提につくられた。この職住分離の前提は、戦後日本の団地、ニュータウンへとほぼ受け継がれた¹⁸⁾。

ここで柳宗悦の思想と、環境開発や環境改造との考え方との関連について触れておこう。柳宗悦には住居を考えるに当たって、住居が立地する土地、周囲（今日の言葉で言えば「環境」）を考慮したが、それを「改造」（改変）して行こうというような発想はほとんどなかったと思われる。例えば、土木工学（civil engineering）は環境を改造する有力な手段である。土木工学とは、1771年、イギリスでmilitary engineeringに対抗してできた生産と交易のための民事工学のことである。土木工学、都市建築、都市計画、地域開発、資源・エネルギー開発の見方からすれば、山を削り、土地を均し、新たな都市空間をつくり、人の移動を図るという発想をしても良いはずである。しかし柳宗悦はそのような発想をしなかったのではないだろうか。それが、大正期、昭和初期における都市に対するの開発派や産業政策派、社会政策派との違い、また他面では、農業における農本主義者たちとの違い、そしてその後の分かれ目になっていったのではないだろうか。

社会や生活を改良し、改善するという発想に立つと、どうしても都市改造の夢や地域開発の夢に引きつけられがちである。建築家が社会改造を夢みて都市構想を唱えるのはなんら不可思議なことではない。

ただし都市構想・改造の夢には、H. ルフェーブルが言うように「都市計画」（urbanisme）なるものの惑わしがある（『都市への権利』[“Le Droit à la ville”, 1968]）。だが、ルフェーブルが警戒したような大規模な都市計画はフランスでは第二次大戦後のことであり、時期的には戦間期の都市構想・改造とは重ならない。またフランスのパリには建築物の高さ制限があり、シカゴやニューヨークのように無制限に（建築技術上の制限は

あるが) 高層建築を建てられなかった。それでもなお、ルフェーブルの視点が重要なのは、人口の移入・集中をかかえた第二次大戦後のパリ郊外に大規模郊外住宅が建設されたように、近代資本主義社会の都市に通底する問題性 (problématique) を都市構想・改造は含んでいるからである。

このような視点を持ち出すと、それは柳宗悦に即した内在的な思想ではない、と批判されるであろう。しかし、柳宗悦の思想にとっては内在的ではない考え方も、柳が農村や都市を、そして民衆をどのように見ていたかを逆照射するものとなるだろう。

——工政会——

社団法人工政会 (1918 [大正7] 年) は、官庁の技官を中心に技術者の地位向上運動のために設立された団体である。1924 (大正13) 年に工政会出版部 (後に、「工業図書」、「産業図書」と名称が変わる) が設立され、長らく常務理事の地位にあった倉橋藤治郎は、立場は異なるが民藝に関する書物を次々と出版していった。倉橋はもと「山為ガラス」に勤務していたから、上野の博覧会に出品された「民藝館」が山本為三郎に購入・移築されたのを取り持ったとされる。山本為三郎はアサヒ・ビールの創業者である。山本は大阪の三国に「民藝館」を移築し、「三国荘」と名づけ、黒田辰秋が製作した食卓や椅子を使用していた。このような関係で山本は民藝運動との関わりも深かった。大山崎にあった加賀正太郎 (ニッカウキスキー創業に参画した) の別荘は、加賀の亡きあとマンション建設予定地となった。別荘の保存運動がおこり、加賀が山本為三郎にニッカの株を託したという古くからの関係もあり、アサヒビールが別荘を購入、保存し、現在「アサヒビール大山崎山荘美術館」として、多くの民藝品を所蔵、展示している。

山本為三郎と「民藝館」を取り持ったとされる倉橋藤治郎は、1910 (明治43) 年大阪高等工業学校窯業科を卒業している。高等工業学校は、工業の専門家・職業人を養成する学校である。この「工業」のなかに、当時は「工芸」に関係する諸学科も混ざっていた。

1900~10年代に、東京高等工業学校 (後、東工大)、大阪高等工業学校

(後、阪大工学部)の編成替えがあった。染色科、窯業科、図案科などが廃止された。1914(大正3)年には大阪高工窯業科の廃止、東京高等工業への統合となった。東京高等工芸学校図案科の廃止、東京美術学校への統合もあった。芹澤銈介は学業の途中で図案科の廃止となった。工芸色が強い学科を縮小・廃止し、より工業色を強めるという国家的な観点が優先された。その結果として、高等工業学校からのちの民藝運動の方面へと流れていったのは、河井寛次郎、濱田庄司、芹澤銈介といった人びとだった。そして倉橋は技術畑であったけれども、古陶器への眼を持ち、民藝への親近感を抱いていた。

倉橋藤治郎がどのようにして民藝運動への関心をもち、関係を持ったのかについては濱田琢司の詳しい研究がある¹⁹⁾。

近代日本の技術者たちの連携、集団、運動の流れを見ると、「工政会」のあと1920(大正9)年「日本工人倶楽部」(宮本武之輔)が発足し、その後「大日本技術会」に統合され、戦後「日科技連」となる。とくに「技官」と呼ばれる人たちは、キャリア官僚の「文官」の下に位置づけられたための不満もあって、工人の運動を支えたという側面もあった。

倉橋が専門とした「窯業」(ceramics)は、陶磁器をはじめ、耐火物、耐火煉瓦、セメント、石膏、ガラス、炭素製品、合成宝石、研磨材、ニューセラミックスをつくる工業の総称である。工業的観点からすれば、工芸としての陶磁器は窯業の周辺に位置することになる。高等工業学校、専門学校の窯業科卒業生は、ただちに芸術的な焼き物をつくる職人となるのではなく、むしろ技術者としての道を歩んだ。

また民藝との直接的な関係はないが、科学・技術と農村との関連では、理研コンツェルンの総帥・大河内正敏に触れておきたい。大河内は「農村の機械工業化」を進めた。大河内は「科学主義工業」「農村工業」に力を入れた。新潟の柏崎が拠点の一つとなった。ピストン・リングの生産で有名な「リケン」は、理研が拠点のひとつとした柏崎の工場のことである。大河内正敏についての研究者でもある宮田親平は、「産業革命は手織機のような副業をいっさい奪い、農家を窮乏におとし入れたが、さいわい資本主義経済は農業そのものには一指も染めることはできなかった」(宮田親平

『「科学者の楽園」をつくった男』日経ビジネス文庫)と述べているが、第二次大戦前の資本主義と農村との関係については再考を要するであろう。大河内は多方面での科学研究者の組織、企業経営を行ったが、自身では焼き物の研究を行っているし、著作もあることを付け加えておく。

——大正期の「民」をめぐる同時性 (synchronicity)——

ここで大正期、いわゆる大正デモクラシー時代の「民衆」像に関連した論調の拡がりを見ておこう。以下に、主要な傾向だけを列挙しておく。これを見るだけでも、大正期の「民」をめぐる論調の同時性をうかがうことができるであろう。

吉野作造の民本主義の主張。吉野作造「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」『中央公論』1916年。

本間久雄「民衆芸術の意義及び価値」『早稲田文学』1916年8月号。

大杉栄「新しき世界のための新しき芸術」1917年。民衆芸術について。

権田保之助の民衆文化論。1920年、大山郁夫と論争した。

森本厚吉の生活文化論、生活改善論。

渋谷のアチック・ミュージアム。宮本常一の民俗学研究。

柳田國男の民俗学の提唱、「常民」の概念の提起。

今和次郎の「民家」研究。『日本の民家』初版(鈴木書店)は、1922(大正11)年出版。この本で「民家」という用語が人口に膾炙するようになったとされるのは既述のとおり。

柳宗悦の「民藝」概念の提唱。中見真理『柳宗悦』(東京大学出版会、141頁、参照)によると、世に「民衆」の言葉が溢れていたころ、柳宗悦は意識的に「民衆」という言葉を避けて使っていない。1921(大正10)年頃、近代的個人に対比的な概念として「民衆」への関心が生まれる。1925(大正14)年に「民藝」という言葉を濱田、河井らと造りだした頃には、柳宗悦は「民衆」という概念を積極的に使用するようになっていた。

上記の「民」の使用法を勘案するならば、「民衆」という言葉は大正期の日本語のなかにその一定の位置を占めるようになっていたことが分かる。それは武家との対比的な概念であった「民」とは違った大衆や民主主

義と同じ地平の言葉となっていた。身分制的観念から社会階層的、社会階級的観念へと「民」の内実を変化させていったと行うことができようか。したがって「民藝」における「民」の観念も、時代に即応した内実を持ち、時代を批判する位置を持ちうる立場にあったということである。

6. もの作りにおける分岐

——国策産業と暮らしのなかのもの作り——

大正時代が終わり（1926年）、昭和の時代に入り、日本は1929（昭和4）年のニューヨーク株式市場の大暴落による「世界恐慌」に突入した。同年、朝鮮では光州学生運動（反日デモ）が起こり、1930（昭和5）年には台湾霧社で反日住民武装蜂起（霧社事件）が、1931（昭和6）年には関東軍が柳条湖の満鉄線路を爆破し、満州事変が起こった。

産業方面で見ると1929（昭和4）年、内閣に産業合理化審議会設置。翌1930（昭和5）年に臨時産業合理局設置（商工省外局）、1931（昭和6）年重要産業統制法公布と続く。ちなみに『日本資本主義発達史講座』の刊行開始、唯物論研究会の設立は1932（昭和7）年であり、戦前の唯物論研究会は1938（昭和13）年まで続いた。

「産業合理化」、「産業統制」が行われたのは戦争経済の遂行のためであり、商工省の基本的な方針となった。産業政策は重工業化を中心としつつ、各産業部門の「合理化」や「標準化」を進めた。このときの合理化（合理主義）は、ある意味で「社会主義的計画経済」と重ね合わせて見ることが可能であった。植民地の満州経営にあたっては岸信介らの商工官僚が力を振るった。岸は、「二キミスケ」（他に、鮎川義介〔よしすけ、通称：あいかわ・ぎすけ〕、松岡洋右、東條英機、星野直樹）と言われた満州国家・社会での実力者うちの一人であった。

この時期のソ連では、いわば国家的な社会主義の実験が行われていた。それは産業主義的な傾向が強く、「合理化」は至上命題であった。この「合理化」にかぎっては社会主義も資本主義も変わりはない。「合理的に」経済や社会を計画し、動かしてゆくという夢は国家の指導層にとって疑う

余地のないものであった。

その事例のひとつとして植民地満州での都市計画を挙げることができる。満州は、建築家にとってフリーハンドで計画を実行できる場所であった。戦争のために資材不足となり、日本本国では自由に設計ができなくなった実力ある建築家がおおく満州に渡って腕をふるった。

戦後になって「40年体制」(野口悠紀雄による呼称)と呼ばれるようになる戦前からの人脈と政策的思想は、この時期に形成されたのである。「40年体制」とは、戦中の商工省、戦後の通産省の経済政策の特徴的な一貫性を指して呼ばれている。このような政策上の「合理性」を念頭におきつつ考えると、たとえば戦争遂行のため労働者をどのように「合理的に」扱うか。兵營の建設をいかに「合理的に」行うか、などの思考法はそのまま集合住宅建設等への応用が可能である。戦後革新派の建築家として名を馳せる西山卯三も建築の「合理化」に取り組んでいた。戦間期から戦後の東西陣営に見られる「合理性」はイデオロギー的な対立にもかかわらず、労働者のための建築物に典型的に見られるようにイデオロギーを超えた「同質性」を見て取ることができる。

「和」から「洋」への進歩史観が明治以降の基本的方向だったとすれば、昭和の時代は米英との戦争遂行のため、イデオロギー上は「洋」に対する「和」(大和魂 [やまとだまし])の強調となった。ここでの「和」(大和魂)は戸坂潤の批判する「日本 [にっぽん] イデオロギー」である(『日本イデオロギー論』1935年)。なお平安時代に紫式部は「大和魂」(やまとだましひ)を言うが、これは「和魂漢才」の「漢才」(かんざえ)を基本にした「大和魂」(やまとだましひ)であり、戸坂の『日本イデオロギー』で批判されるような「大和魂」そのものではない。日本イデオロギーの「和」は、ここで「洋」(欧米)とも「漢」(中国)とも切り離されて、それらと対立する「和」となっていることが分かる。

日本国家の総動員体制を、技術や経済的な側面から見ると、生産力向上のための合理化を徹底的に追求し、経済を国家の統制下に置き「総力戦」に備えるというのが国家官僚の目指したところだった。1940(昭和15)年頃になると、総動員体制への不満も昂じてきて、政府は地方文化、農村文

化の称揚をはかるようになった。このような情勢で、民藝は本来ならば資本主義的近代化とはそりが合わないはずであるが、好機ととらえ国策と「共振」する民藝関係者も多くでてきた。柳宗悦も1937（昭和12）年に、山形県の農林省積雪地方農村経済調査所（雪調）から民藝品調査を依頼された。1940（昭和15）年の後半から、「政府関係者への働きかけを活発化させ、同年九月には日本民芸館において、雪調主催による地方工芸振興機関結成のための協議会が開催されるにいたっている」（中見真理『柳宗悦』岩波新書、152頁）。このように、1930年代末から1941（昭和16）年の太平洋戦争突入、そして敗戦までの期間、柳宗悦と民藝運動の仲間は国策との関係をめぐり、それぞれの対応を迫られた。中には積極的に「帝国」日本の方向に同調する者もいたが、柳宗悦はそういう方向には走らなかったようである。

戦後の柳宗悦は、左翼運動、あるいは「民衆」運動へ同調する民芸関係者によって逆の方向から批判されることになる。

なお、「雪調」に関しては、今和次郎も協力を依頼され、恩賜郷倉、雪調山形事務所の建築設計もしている。また民藝関係者と同じ場所に居合わせたこともある。今和次郎の場合は、農商務省農政課長だった石黒忠篤からの依頼で農村の「民家」調査からの延長線上にあって、農民と住居の問題を考え調査し、実践もしていた。戦前の農政との関係で農「民」を捉え、さらに農村の生活と工芸との関連は、戦前期の民衆像を捉える際には欠かすことができない課題である。（だが、現在はこの課題に関して論述する余裕がない。）

戦時中の柳宗悦の仕事として『手仕事の日本』、『民藝図録、現在篇』の執筆がある。前者の小間絵、後者の原稿は戦災で灰燼に帰した。『手仕事の日本』の原稿は幸いにも残ったが、検閲で「日本は朝鮮のような半島ではなく島国である」という言葉や「平和」という言葉が引っかかり抹殺されたと述べている（『手仕事の日本』「序」、岩波文庫）。『手仕事の日本』は、「戦争直前の日本」の工藝を語るものであるが、柳宗悦が語るとおりその仕事は結果として戦後の日本において「必要とされる案内書」（同前書、「序」）となった。

7. 戦後日本社会における「民藝」の位置と意義

第二次大戦後（戦後）の柳宗悦を論じるにあたって、さらに「戦後民主主義」という問題設定をするとき、「戦後」なる意識はどの時点までの意識なのかということも考慮に入れなければならないだろう。それは「民藝」というものに対する世評、価値評価にも関わってくる。戦後の「民藝」に対しては何度かの注目や批判の波があったが、それぞれ異なった認識と関心のあり方からだったように思われる。

第二次大戦が終わってから70年以上経過した。「戦争を知らない」子どもたちも高齢期となった。それでも、戦後のある一定時期までに生まれた人間には戦後の雰囲気を感じ取ることができた。小説家の小田実は、戦後ではなく戦中期に青少年時代を送った世代である。小田は終戦直前に大阪の大空襲を体験し、焼死体ごろがっている悲惨な有様を直視していた。生涯を通しての小田実の反戦運動はまさしく身体感覚で捉えられたものであった。漫画家の手塚治虫も学生（研修医）時代に同じような体験をしている。彼らにとって「戦争」といえば、自分と周囲の見知らぬ人々も含めて、生死に直接関わる問題であった。

いまでは若者たちにとって、言葉で「戦後」といっても直ちに「第二次世界大戦」を指さず、どの戦争が「戦争」なのかも分からなくなっている。「戦後民主主義」を守れといっても、その掛け声がまったく理解されない時代になっているのではないだろうか。

その意味では「維新百年」か「民権百年」という問題設定がなされた時が、おそらく「戦後民主主義」の理想が生きていた最後の時代だったのではないだろうか。戦後生まれでも「戦後」をそこかしこに感じる事が出来た時代に育った世代がいた。明治維新百年は1968（昭和43）年であり、ちょうどこの年に「大学紛争」（東大闘争、日大闘争）が起り、戦後民主主義を守れという主張と戦後民主主義の虚妄を唱える勢力とが対立した。この時期は戦後社会における思想の転換期の一つだった。

柳宗悦は1969年の大学紛争、1970年安保闘争に先立つ1961（昭和36）年に死去した。60年「安保闘争」のすぐ後であり、その時代はまだ新生日本

の建設を課題としつつ、「戦後民主主義」が信じられていた時代に生を終えたことになる。柳宗悦は戦前の日本社会の変容のさなかにあっては「伝統」を守ろうとした側に位置した。戦後の日本再建にあたっては、そのような日本の「伝統」の維持・発展を願う立場をとること自体が、とすれば民主主義との離反と受けとめられがちだった。当面する政治的課題のみから柳宗悦の思想を評価すると、どうしても彼の思想とのズレが生じてくるのではなかろうか。

ここで戦後政治の領域以外に目を移してみよう。

柳宗悦の死後、1970年代ともなると、高度経済成長が一段落し、「消費社会」という観点から民藝が語られるようになった。

1970（昭和45）年に、国鉄の「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンが始まった。このキャンペーンは長期にわたり1976（昭和51）年まで続いた。国鉄から依頼された電通が仕掛けたキャンペーンである。それは日本の伝統文化への誘いを醸し出した。そのなかで「民藝」の「再発見」もなされた。『an・an』、『non-no』といった女性週刊誌も「伝統」文化をとりあげ、民藝もそのなかで再注目された。それは民主主義という政治的課題とは関係の薄い地方への旅行を促す消費社会のキャンペーンだった。しかし、農村と都市の対比で言えば、高度成長がほぼ終わり都市化を遂げた後の日本社会を新しく見直す契機も含んでいた。

また、戦後の婦人雑誌の実用性から、若い女性をターゲットにした女性週刊誌へとメディアの消費者の扱い方も変化していた。すでにテレビの普及は行き渡り、映像イメージのなかに「伝統」を「新しい」ものとして取り込み、表現する時期に至っていた。戦後も30年ほど経つと「古きもの」を「新しいもの」「新奇なもの」として「再発見」する感性が育っていたのである。

——戦後の日本社会の時代区分——

日本社会を70年代以降の、さらに長期の観点から見るとどのように時代区分をできるだろうか。

戦後の日本社会は、経済的な観点から見てその時期を大別すれば、戦後

の日本（1955年まで）、高度成長期、石油ショックのあとの低成長期、80年代半ばから90年代初頭のバブル期、90年代からのグローバル化の時代に分けることができる。とくに1995年頃から本格的にグローバル化の時代を迎えたように思われる。

社会的生産力の基本的様態の変化は、日本社会の構造変化を促した。

戦後の復興期から70年代初頭までに達成した高度経済成長の結果、日本社会は戦前期と様変わりした。農村社会が主流だった日本は工業化を遂げ、重厚長大産業を形成し、都市化した。戦後当初の復興からはじまり、更に工業化を推し進めた結果、日本人口の多くが農村から流出し、農民は労働者、サラリーマンになっていった。国内の人口移動が起こり、人口からみる地域的重点が都市地域へと移動した。農村から都市への人の流出は、たとえば「大地の芸術祭」で有名となった新潟妻有の過疎地化の事例を挙げることができる。古老の話では、100世帯くらいの地域が20世帯くらいになったと言う。今となっては町村大合併で旧の地名となってしまった「妻有」は十日町、松代、松之山、津南といった地域に広がる米どころである。妻有は世界でも有数の豪雪地帯で何メートルもの雪が積もり、冬は長い。土地の若者は競って都会の働き場へ出ていったという。

「過疎化」によって、かつての農村の共同体は機能不全化していった。古老の話聞いたのは廃校となった小学校であり、そこが大地の芸術祭の会場にもなっている。ここに立ち、この地にはいなくなった人々の行く末と重ね合わせると日本社会の変化の大きさを思わざるをえない。

「過疎化」という言葉が唱えられていた時期から進んで、いまでは「限界集落」という言い方がされている。集落の機能の限界を越えた果てには、集落そのものが消滅する²⁰⁾。このようにして、各地に存在したであろう民藝品を産み出す基盤は崩壊していった。また民藝品とも関連の深かった軽工業（繊維産業）なども戦後の一定の時期から衰退し、そのせいもあって地域経済は弱体化した。先ほどの妻有がある十日町市（絹織物）もそうであるし、小千谷縮や丹後の縮緬など、枚挙にいとまがない。

繊維工業から出発した近代日本の資本主義は、機械工業を発展させ、労働者を工場に集め、工場内、企業間の分業を推し進め、さらには鉄鋼、金

属、石油、電気、自動車などの大工業を発達させた。そこには龐大な人口が集中し、都市は膨張した。また戦後日本の太平洋側沿海部には、鉄鋼、石油化学などのコンビナート（комбинат）が建設された。旧ソ連で生産組織の合理化のための地域的結合体を表す言葉が日本でも使われた。

戦後になって、民藝のジャンルにはいる様々の民藝品、工藝品は、概ね戦前期よりもより激しく衰退していった。戦後の資本主義の下での衰退とはレベルが異なるが、すでに戦前期に柳宗悦は、明治期以来の資本主義の発展とともに工藝品が劣悪化、衰退してゆく状況を、憂慮をもって見ていた。江戸時代までの社会構造が変わるとともに様々な分野での変化（衰退、消滅）がみられたのである。

柳田國男も柳宗悦と同じように旧来の文化が消滅してしまうというという危機感を抱いていた。旧来の文化を別様に言い直すと「伝統的文化」という用語にもなるだろう。柳田は、旧来の文化の消滅と新しい文化の出現を『明治大正史世相篇』に書き記した。文化の変貌期にあたり、いま書いておかないと何があったのが永久にわからなくなるとの危惧をもったからである。

そもそも資本主義社会の原動力である産業革命を起こしたのはイギリスである。そのイギリスで活躍したウィリアム・モリスも資本主義の機械制工業の製品の劣悪化に抗して芸術運動を展開した。柳宗悦自身は否定的に述べているが、モリスからの「影響」もあったことであろう。モリスの思想、デザインを日本へ紹介したのは、柳宗悦とともに民藝運動を始めた一人である富本憲吉だった。モリスと柳宗悦が、そして機械工業製品、機械的工芸に反対した人びとが共通に着目した点は、手によって作り出された工藝品の美しさだった。

——モノを生み出す人びとの変化（民衆自身の変化）——

日本は近代社会になってから、生活のなかの道具類と、その道具を使ってモノを作る人間との関係が変化してきた。その変化の事情を、幕末期から第二次大戦後の一定の時期までの「衣」に関しての事例を通して見てみよう。

福沢諭吉は『福翁自伝』のなかで、大阪の適塾に遊学していたとき、着るものは国許の母親が織って着物に仕立て、送ってくれたと述べている。衣服に関しては、下級武士の家でも織物、仕立てをしていたことが分かる。武家の女性といえども織物、仕立ての技術を身につけていたのである。当然のことながら、民藝品に数えられるものの中には、職人が専門的に作るものだけではなく、民衆が自ら作るものも多く含まれていた。小巾(こぎん、小布)、継当などが民藝品として取りあげられること自体、それらが民衆の生活の中から作り出されたことを物語っている。

現在も手機で手織物をつくっている人にこんな話を聞いたことがある。戦後のかなりの時期まで、それぞれの家には小さな手機の織機(手織機)があって、中には相当大きな織機もあった。それらは戦後になって捨てられてしまい、家の後ろの藪のなかに転がっていた。それをもってきて今は各種の織物をしているという。その人の家には小さいものから大きなものまで色々な織機が置かれていた。それを見ると、織物の多様性はこういった各種の用途に合わせた織機にも由来していたことがわかる。

また、別の手織りをする人からはこんなことを聞いた。戦後の婦人雑誌の付録には、洋服の型紙がついていた。洋服は買うものではなく自分で作って着たという。紡ぎ、織り、仕立て(裁縫)、刺繍、刺し物、こういった事柄は家庭のなかで行われていた。衣食住の「衣」はみずから作りだしていた部分が大きかった。その時期を尋ねると、だいたい東京オリンピックの頃までは洋服は自分で作っていたという。時期は高度経済成長の最中で、その頃に民衆の「生活の仕方全体」(R.ウィリアムズ)が大きく変動し、「感情の構造」も変化していったと受け取れるのではなかろうか²¹⁾。

農村の生活の様子を戦前と戦後を通して見るならば、衣食住については、「村」レベルの地域単位で見れば、かなりの程度で自立自営の状態にあったと言える。農村での生活はそもそも自足的な形態をしていた。工場やオフィスでの「労働者」と、民藝で想定する「民衆」との違いとは、基本的には「生活」の組み立て方が異なっていることにある。労働者は工場やオフィスで働き、賃金をもらって彼らの生活を組み立てる。その賃金で

生活物資を購入し、生活を維持する。農民の生活の組み立てをみると、たとえば戦後の自立的な米作農民の場合には、「米」を農協に出荷し、その代金を得るが、衣食住に関しては、かなりの程度自足的な生活形態であった。戦後の農民の自作、小作、兼業の形態の違い、「自足」の程度の違いは今考察の外に置いておく。

工場労働者も農民も生産者であるが、作り出すモノが違う。その生産物の違いが農業と工業の違いであるし、工業の方が圧倒的に物質的な生産性は高いので、生産過程における速度の違いは時間感覚の違いともなってくる。季節という時間軸に沿った循環的で有機的な、生物学的な時間感覚は、工業にはない。完全自動ロボット生産方式（無人工場）では、照明のない闇の状態でもロボットは動き、昼夜の別も考慮しなくてもよい。生産性の向上という点において工業化は「進歩」であると言えるが、個々の人びとの「生活」という単位の「自立性」の観点から見ると「退歩」とも言える場面が出現する。工業化社会における人間の自立性は、当該の人間が関係している工業の直接的過程以外のなんらかの媒介性、共同性、社会性によって確保されねばなくなってくる。この点について、経済学、社会学では、労働の社会化、家庭機能の社会化、あるいは外部化という観点から論じられてきた。さらにまた、生命（生活）の再生産という観点からは、国家や社会の共同性という観点から、社会保障、福祉国家の確立が強く主張されてきた。これらの点からも経済成長至上主義、生産力拡大至上主義とは異なる見方からの社会形成をも視野にいれて「生活の自立性」を議論をすべき時代となっている。その意味では、旧い生活形態のなかから民藝がでてきたのだから、旧来の伝統的生活に戻れと、社会的媒介性を抜きにして、単純に掛け声をかけても、以前のような民藝の作品が生まれてくるわけではない。

8. 「民衆」から「労働者」、そして「市民」へ

——戦後の民衆運動における「主体」の理解の仕方の変遷——

今日では社会運動を、「民衆」運動でもなく、「大衆」運動でもなく、ま

た「労働」運動でもなく、「市民運動」と呼ぶことが多い。「市民」という言葉を自覚的に使用し始めたのは久野収「市民主義の成立」（『思想の科学』1960年8月）あたりからだと言われている。50年代～60年代にかけての大衆社会論争でも「市民」という言葉を松下圭一が使っており、おそらく労働者運動とは異なる次元の「社会運動形態」が意識されだしたことにもよるだろう。ここで戦後の社会運動の事例を、久野や松下と関わらせて議論を進めたい。それは戦後の日本各地にできた住宅「団地」の「市民」（団地市民）という存在に注目したいからである。ちなみに久野収も〔1960（昭和35）年に〕、松下圭一も〔久野の後で〕、枚方の香里団地で講演を行っている。香里団地では保育所設立運動（市民運動）が先駆的に行われた場所である²²⁾。

そこで何故、「民衆」ではなく「市民」だったのか、という疑問が生じる。それは、戦後日本の社会の変貌と密接な関わりがあるであろう。戦後の民衆の集住の形態から、その変貌の有様の一端を振り返ってみよう。

——民衆の住み方の変遷——

戦前期から大都市では、民衆は集住していた。また大阪市では戦後の団地と同じような鉄筋コンクリート造りの住宅が戦前から開発されてもいた。とりこわされて無くなってしまった大阪の下寺第一住宅などがそれであった。関東大震災をきっかけとした東京の同潤会アパートでは、最先端の都会での良質の集住形態が追求されていた。同潤会アパートの住人も社会の最先端を走るような人々が住んでいたと言われる。しかしそれは大都市の大勢ではなかったし、地方都市ではそのような試みもなかった。

1920年代の大阪では、賄い付きの下宿が主流だったが、そのころになると各戸が独立した鍵付きのアパート〔洋風長屋〕が天下茶屋、萩ノ茶屋に現れてきた。1941（昭和16）年の調査では、大阪の住宅数は64万戸、その内の89%は借家だった。しかもほとんどが木造だった。大正期の郊外住宅地の帝塚山、1931（昭和6）年の下寺第一住宅（鉄筋コンクリート）は、大阪の木造借家暮らしからすると最新の住宅であった。大阪の木賃住宅の多くは戦災で焼失した。

大阪での勤労者の住宅の最先端の形は、戦前の千里山住宅地〔1922（大正11）年、田園都市構想型〕から戦後の千里ニュータウン〔1962（昭和37）年街開き、ニュータウン型〕の形へと基本型が変わった。千里ニュータウンの空間設計を手がけたのは西山卯三とその研究室のメンバーである。そして西山は千里丘陵の大阪万博の会場のマスタープランを描いた。万博会場の設計は、前半は西山が担当し、後半は丹下健三が担当した。戦前期のところでも述べたように、西山卯三は集合住宅を得意としていた。公団住宅の間取りを決めたのも西山の理論によるところが多い。また西山は社会主義的思想の持ち主でもあった。その意味で西山の仕事の軌跡は大変興味深いものがある。

大きな団地設計では、枚方の香里団地〔1958（昭和33）年入居開始〕を日本住宅公団から依頼されて西山研究室が団地空間の基本プランを描いた〔1956（昭和31）年提案〕。京都では洛西ニュータウンも西山研究室が手がけた。以上、いずれも大規模なニュータウンを西山研究室は手がけている。

戦前に遡るが、千里山住宅地は、箕面の桜井住宅博覧会の時期と同じ1922（大正11）年に分譲が開始された。千里山、桜井の住宅は、良質、モダンな建て売り住宅、住宅地であって、中産階級しか購入できなかった住宅であろう。今和次郎の言う「民家」か？という、今が採集したような意味での「民家」とは言えないだろう。「民」の「生業」と家の形が直結していないからである。郊外に住み大阪の中心地に「通勤」する中産階級の「理想」（職住分離、洋風住宅）を表現した住宅地である。ところで、千里山、桜井の両方の住宅地を見ると、戦後の千里ニュータウンのような住宅地とでは、個々の宅地と道路の空間スケールの点でまったく異なる。千里山住宅地の空間のスケールは、すくなくとも1967（昭和42）年頃までは続いている。大阪南部の羽曳野住宅地（昭和42年）は千里山住宅地と同様の空間スケールであり、その空間スケールは阪神間の良質といわれる各地の住宅地でも見られる。

千里山住宅地と千里ニュータウンの決定的な違いは道路である。後者はモータリゼーション、車社会を前提とした空間設計をしている。新しい空

間設計では、歩車分離の原則にのっとり歩道が整備されている。車が主に走る道路では、車道と歩道のあいだに植樹帯が設けられているところも多い。戸建て住宅地エリアでは歩道はないところが多いが、車の擦れ違いには余裕がある。また人と車のスピードの違いを考慮して立体交差を取り入れ、ニュータウンの空間設計に未来都市の形をあらわそうとする意思が見て取れる。千里ニュータウンという住宅地は、大阪万博会場に隣っており、あきらかに新時代の住居を意識した設計となっていた。入居から50年近く経ち、樹林帯の樹木は大きく育ち、一般の街路樹のようにやたらと幹や枝を切り落としていないので、あたかもヨーロッパの住宅地を見ているような日本離れた住宅景観が広がっている。千里ニュータウンができた当初は、その住人の社会的性質から見ると、戦前の郊外住宅地の住人の性質を受け継いでいた。上層サラリーマンの住宅であったし、「職住分離」を前提としていた。現在の評価はともかくとして、当時は最先端の「憧れ」の住宅であった。戦後日本の経済的・社会的変動を見越しての典型的な大規模住宅地計画であった。

参考までに関西のニュータウンまち開きの年代を挙げておこう²³⁾。

千里ニュータウン入居の1962(昭和37)年から、箕面森町の2007(平成19)年まで、45年経っている。一世代以上の年月が過ぎて、早期に入居が始まった各地のニュータウンもオールドタウンと呼ばれる時代となった。全国各地の団地で高齢化が問題となり、団地の縮小が課題とされてくるようになってきている。個々の団地での様相は異なるが、生活の組み立てという視点から見ると既に折り返しの地点は過ぎて、組み立てそのものが問い直される時点になってしまった。それは時間の積み重ねにより、あらためて民衆の生活とは何かという問いかけが、平面的ではなく、立体的に見えるようになったということでもある。

——ニュータウンの「市民」像——

ニュータウンに住む人びとは「民衆」か?というのと、どうも民衆という言葉になじまない。では、なぜ「市民」なのか?というのと、民衆運動でもなく、主婦運動でもなく、労働者運動でもなかったということになるう

か。ある特定の社会的属性で表現されないような、それらの既存の言葉では、人々の集結力・集合力、組織する力、地域を横断する力を確保できず、また表現できない社会的な存在が「市民」であった。しかも、「主体的」存在であることを求められる存在であった。それを「市民」として表現したのが久野収であり、松下圭一である。ところで、その「主体」の意思表示や取り組む課題は、自立はしていても孤立しては達成しえないものであった。新たな空間へと移り住んだ人たちは、それまでの近所付き合いとは異なる新たな人間関係を取り結び、課題ごとに生じてくる生活機能の充足を図らなければならなかったからである。

団地の「市民」意識は団地という地域インフラ（地域空間）に規定されている。その市民意識は、団地の「社会空間」、都市「構造」に由来し、その意識の多くは郊外住宅地（団地）という「下部構造」に由来する上部構造の部分としてである。「主婦」「勤労者」は、いわゆる〈労働者〉（肉体労働者 [ouvrier (-ère)]）ではなかった。戦前に形成された千里山住宅地を見るならば、それは郊外に住む上級サラリーマンと専業主婦からなる家庭の住宅地だった。70年代初頭に日本の専業主婦層の存在は最大値になる。和田悠氏の香里団地を舞台にした研究では、1966（昭和41）年頃には男性の勤労者は企業の方へ吸収されていったのではないかと、という推測をしている。日本の企業中心主義社会の確立と専業主婦層の増大と併せてみると興味深い推測であり、団地の住人の実感とも相即しているだろう。

全国各地の工業団地、流通団地が同じような形で建築物が並んでおり、表示がなければ初めてその団地に行く人間が迷うように、住宅団地でも一斉に入居し、一斉に出生し、一斉に子育て、一斉に高齢化していった。ほぼ同一年齢層の居住者たちが同じような塊となって生活していたのが住宅団地である。たまたま同じ団地に住めば、見ず知らずの人々は同じ時期に同じような問題に突き当たった。

日本の社会が戦後の混乱期から経済成長の方向へと梶を切っていった時代に「市民」運動が登場する。香里団地での保育運動はその典型的な事例だったのではないだろうか。久野収は「市民主義の成立」（1960年）のなかで、「市民」とは「職業を通じてのみ生活をたてている人間」とし、そ

の特質を二つ挙げている。一つは「職業と生活の分離が必要」であり、農村では「両方がごちゃまぜ」になっていると言う。もう一つの特徴は「職業組織は本来国家権力とは無関係だ」とし、ギルドやツンフトの例を挙げている。また市民運動とは「職業人としての自覚に立った運動」とし、「市民会議」(地域における主権者組織)の着想を披露している。農村社会との分離を唱える点では、松下圭一の日本社会における「ムラ状況」の指摘と相通じる考えであろう。久野の言う「職業」は「生業」(ナリワイ)ではない。「職業」から切り離された「生活」の場の形は、今和次郎が調査したような、生業と結びついた「民家」の形態とはならない。住宅団地の何号棟何号室という家の形(空間形式)と「民家」の形(空間形式)が同一にはならない。

松下圭一は『『市民』的人間型の現代的可能性』(『思想』No.504、1966年6月)で、「市民」とは「私的、公的自治活動をなしうる自発的人間型」(同上、18頁)と定義し、「市民的徳性〔エトス〕の大量的成熟は、工業力の拡充と民主主義の展開による生活水準の上昇と伝統的階層の崩壊、したがってまた都市的生活様式の拡大ともなう余暇の増大や情報の知的選択の可能性の増大によってはじめて可能になる」(同上、19頁)と書いていた。上記の記述からのみ判断すると、松下はマルクス主義者たちと論争をしたが、生産力の向上、生活水準の向上、都市的生活様式の拡大など、社会の変化の基本的方向、枠組みはマルクス主義者と同じであったと言えるのではなかろうか。両者の違いは、社会変革を促す主体が「市民」か、「プロレタリア」かということにあった。

ところで、久野や松下が言うような、農村における職業と生活の密着を廃し、民主主義と工業化においてこそ市民の形成がなされるとすれば、柳宗悦の民藝論が想定していたような民衆像は受け入れられる余地がほとんどない。柳宗悦の唱える「民衆」とは、「市民」でもなければ「プロレタリア」でもない。そのような人間類型が歴史的に出現する以前の、たとえば江戸時代の「民衆」を念頭におけば、社会的範疇としての民衆像は、近代的・都市的生活以前のもの、伝統的なもの、農民的なもの、職人的なもの、等々で規定されるような人間像となる。要するに未来社会に「新し

く」求められるような「新しい人間像」ではない。過去に生きてきた人間も含めて、生きて生活を営んでいる人間であるかぎりの人間が柳宗悦では民衆として想定されていたと言えるであろう。柳宗悦の民衆概念は「近代」や「都市」そのものとは異なった地平にある概念である。

久野収が「市民主義」を唱えたとき、そしてベ平連の中心的活動家となった小田実が「普通の人びと」を唱えたとき、それは「民」の新たな言い換えだったのではないか。しかし、「市民」という概念のもとで、「民」が言いかえられたとき、そこには戦後の意識からは抑圧され、消え去ったものがあつたのではないだろうか。「市民」＝「民衆」とされたとき、それは戦後日本社会での「新しき」主体、新しき社会を形成する「理念的」主体を意味していた。しかしながら、社会構造、空間構造がもつ意味の総体（総体性概念）が「市民」概念の定式化で十分表出されていたとは思えない。戦後民主主義の立場を支持し、推し進めた人々のなかでも松下圭一、久野収、小田実、鶴見俊輔、藤田省三の間では、「市民」の観念に関して違いが見られるのではないだろうか。

たとえば鶴見俊輔が一貫して柳宗悦をとりあげ、肯定的な評価を与えたのは、「民」への関心の持ち方に他の論者とは異なる、彼に独特のものがあつたからのように思われる。それは鶴見が「市民」という言葉を使いながら、近代主義的な市民像とは違った地平の上に立っていたからではないだろうか。

鶴見は『戦後日本の大衆文化史』（岩波書店、1984年）の「普通の市民と市民運動」のなかで、戦前の「サークル」²⁴⁾という用語から始めて、戦後のアマチュアの小集団としてサークルが自立化し、日常語としての根を下ろした理由を玉城哲〔あきら〕の考えを紹介しながら「村の伝統」という考え方を示している。そして田中正造の事例を出して次ぎのように述べている。

「田中正造は昔からの村の伝統によって国家の権威とその国家の行政を預かる官僚を批判する見方をつくりました。田中は村が衰えるときに国家もまた衰えるという見方を持ち、この一つの小さな村が日本である、ということを行いました」。

このような鶴見俊輔の言い方のなかには、「伝統」の捉え返しの点で、柳宗悦の民藝観と通じ合うものをもっていたのではないだろうか。

本稿においては建築論的思考を導きの糸としたので、最後に、「民」の生きる場所について触れておきたい。柳宗悦や今和次郎の建築観は、建築を自然との関係で見ると画期的なものだった、と藤田治彦は指摘している。それは、そのとおりでであろう。しかし、柳や今らが重要視した「民藝」「民家」における「民」の観点からすると、民そのもののあり方が変化してきたことがわかる。「民藝建築」は第二次大戦後にも造られ続けられた。それは1970年代にも及ぶし、また「民藝風」建築をも含めるならば、「民芸喫茶」などの「民芸～」という形での非常に多くの建築物を数えることができるであろう。だが「民」が「労働者」「市民」と呼び換えられるような時期に、民藝建築は集合住宅、団地としては展開しなかった。その点で民藝建築は、社会的な機能主義的建築観（≒社会主義的な機能主義）とは異なった「自然性」を帯びていた。また民藝建築は多くの場合に「注文」に応じて建築されたという点で、社会的なステータス性をも帯びた建築ともなった。建材や工法からして一般庶民では民藝建築を建てることは困難だったであろう。結局のところ、うまく稼いだ市民が「あの人は買った家に住んでいる」と言われることになるのが実際のところであった²⁵⁾。

今和次郎の「民家」も戦後まで改訂を重ね、民家採集の範囲をより広めていった。彼の『日本の民家』には、相模国津久井郡内郷村の重要な調査記録が収められている。これは1918（大正7）年の夏「郷土会」と合同で行った調査のときの記録であり、1917（大正6）年結成の「白茅会」の調査と併せて日本の民家調査としては最初期のものである。2012（平成24）年になって、瀝青会『今和次郎「日本の民家」再訪』（平凡社）が出版された。この書物は『日本の民家』初版の調査地を再訪した記録、分析である。内郷村も訪れている。そこで明らかになったことのひとつが、今の『見聞野帖』のスケッチにある内郷村手前の中洲にあった農村風景が無くなっていることだ。ダムが建設され、村が水没したのである。今和次郎たちが踏査したときダムはなかった。ダムは1947（昭和22）年に完成し、相

模湖と呼ばれている。古くから内郷村の周辺を流れる相模川、道志川は、大都市横浜、川崎の水源の標的とされていた。JR中央線で高尾の先のトンネルをくぐり抜けると神奈川県になる。相模という古い国名を通っていた街道筋は、新しく神奈川県と行政名が変わっても道筋としてはそのまま通じている。ところが新造された相模湖のみならず、その周辺にもある多くの人造湖は京浜工業地帯を支える水源として造られた。工業地帯に「民」が集結して、働き、生活をするためでもあった。今和次郎は横浜、川崎の集合住宅を民家としては取りあげていない。「津久井郡」の地から相模の海の方へと眼を向ければ、山から海のあいだに、膨大な民の住居が相模、多摩地方から川崎、横浜にかけて存在している。それを考えると、横浜の高層建築と道志の山林（自然）との間に、自治体（地方政府）、企業、社会、国家などを構成する諸組織があり、さまざまな形態の民や公の龐大な建築物が存在している。現代という社会の場においては、「民衆」の「建築物」と「自然」とは直接的に結び付いているのではないことがわかる。現代の「民衆」は「第二の自然」（ヘーゲル）のなかを生きざるをえないのである。

このように見るならば、柳宗悦の民藝における「民」の観念は「自然」との付き合いが深いことをその特徴としていることがあらためてわかるというものであろう。柳の民藝理論に含まれる「自然」の観念は、「理念的存在」として、柳宗悦の理論と実践の「弱み」でもあるし、「強み」を構成するものでもある。

注

- 1) 鶴見俊輔「日本の観念論－白樺派－」『現代日本の思想』岩波新書、1956年11月、所収。柳宗悦も含まれる白樺派の評価に関して、鶴見はこの論文のなかで、「明治の末に出発し、今日まで、ほとんど五十年、影響力をもちつづけてきた思想運動として、その〔白樺派の〕業績は、観念論という思想流派のなしとげうるかぎりでの最もよいものをふくんでいる。昭和時代におよぶ最も実りある観念論の運動であると思う。『心』そのたの軸として、この思想は戦後の保守主義の思想家たちのささえとなっている以上、白樺派の仕事を公平に評価することは、今後の前進のために私たちにぜひ必要なことと思われる」と述べている。

2) 吉井忠『民藝論』(彰考書院、昭和22年9月)の場合はマルクス主義的な観点から社会発展史観を基本としての批判であった。寿岳文章の場合も政治や経済と民藝との関係を意識的に追究する観点があった。「われわれの生活を規制している政治や経済のしくみは、はたして民芸運動と相容れるものかどうか。この問いへの鋭いねばり強い糾明を抜きにして民芸運動は、賽の河原に石を積む小児の営みにすぎぬような気がする」(寿岳文章『柳宗悦と共に』集英社、昭和55年7月、333頁)。中見眞理の場合、柳宗悦の妙好人のとらえ方は、鈴木大拙の疑問や家永三郎の批判的視点と異なり、「柳にはこのような批判的観点が全くといって良いほどみられない」と述べている(中見眞理「解説」、寿岳文章編『柳宗悦 妙好人論集』岩波文庫、1991年2月、所収)。中見は他方で「アナーキズム」の観点から柳宗悦の平和思想を評価する。その点で単なる社会発展史観とは言えない。

3) ポストモダンの批判の仕方については、石原千秋『大学生の論文執筆法』筑摩新書、参照。

4) 柳宗悦研究の書物をいくつか挙げておく。本文中に挙げた文献と合わせて研究動向の補足の資としていただきたい。

柳宗悦論としての文献。

○伊藤徹『柳宗悦 手としての人間』平凡社、2003年6月。

○松井健『文化学への脱＝構築』榕樹書林、1998年9月。

柳宗悦批判としての文献。

○柄谷行人「美学の効用——『オリエンタリズム』以後——」『批評空間』Ⅱ-14、1997年。

○太田好信『トランスポジションの思想』世界思想社、1998年。

○小熊英二『〈日本人〉の境界』新曜社、1998年。

○岩竹美加子「統合と排除の民俗学——柳宗悦『手仕事の日本』を読む」『未来』1999年1～3月。

技術論の観点からの柳宗悦の評価。

三枝博音『技術の哲学』岩波全書。

最近の民藝に関する著作。

○鞍田崇、編集部編『〈民藝〉のレッスン——つたなさの技法』フィルムアート社、2012年。最近の民藝の取りあげ方の事例として。

○前田英樹『民俗と民藝』講談社選書メチエ、2013年4月。柳田國男と柳宗悦について。

5) ここで「妙好品」というのは、戦中・戦後の鈴木大拙『日本的靈性』(1944年[昭和19年])、『妙好人』(1948年[昭和23年])を受けて、柳宗悦は戦後に民藝と「妙好人」の宗教的関連について展開したことから由来する「民藝品」についての別称である。『柳宗悦 妙好人論集』岩波文庫、1991年、参照。

- 6) 岡村吉右衛門『柳宗悦と初期民藝運動』玉川大学出版部、1991年10月。岡村は民藝史の分類と「藩政城下町文化」と城下町文化の崩壊を論じている。歴史的な観点からの興味深い分析である。
- 7) 日本の人口の変化から見ると、鎌倉幕府成立時の700万人台から、緩やかな上昇カーブを描いて、徳川幕府成立時（1603年）には1,200万人台。そこから3,000万人台に達した。しかし徳川吉宗の享保の改革（1717年～45年）以来、明治維新までほぼ3,000万人台の横ばい状態が続いた。明治維新時（1868年）の3,300万人台から2004年の1億2千万人台まで急激な人口の増大があった。享保以降の人口の横ばい状態、一種の定常状態を見るならば、日本社会の枠組みの固定性があったことも確かである。
- 8) 拙稿「和紙生産と民藝運動覚書——戦前・戦後の和紙生産と民藝運動」『irori』No. 3、2005年。
- 9) 中見真理『柳宗悦－「複合の美」の思想』岩波新書、60～61頁。
- 10) 佐藤道信『明治国家と近代美術』吉川弘文館、平成11年。土田真紀『さまよえる工藝』草風館、2007年、参照。
- 11) 柳宗悦「仏教に帰る」（1955年）、『柳宗悦 妙好人論集』岩波文庫、1991年、所収。
- 12) 拙稿「民衆の工芸の可能性」『批判的〈知〉の復権』（唯物論研究年誌第十五号）、大月書店、2010年10月、所収。
- 13) 西山卯三、他『大正「住宅改造博覧会」の夢』INAX、1990年。
- 14) 祐成保志「住居—交渉過程としての住まい」『文化の社会学』有斐閣、2007年2月、所収。1920～30年代は、「住居という空間の社会的配置の転換期」であったと祐成は述べている。また同時期、「日本では住宅の『設計競技』がさかんに行われた」。その結果として、「プランの収集、評価を通じて、居住者像、住宅設計の基準が定まり始め、建築専門家に開示されていった」。そして論争を通じて、「大正期の生活文化論、戦時期の国民住居論、戦後の小住宅論へ引き継がれる」ことになったという見解を述べている。明治維新から50～60年経った時点で、自分たちの住まいに対する近代日本の新しい感覚が育ってきていたということであろう。
- 15) 石原享一『戦後日本の経済と社会』岩波ジュニア新書、2015年、35頁。
- 16) 津金澤聰廣『宝塚戦略』講談社現代新書、1991年。
- 17) 柴田徳衛『世界の都市をめぐる』岩波新書、1964年。「3 人種のるつぼニューヨーク」（57頁以下）参照。
- 18) 拙稿「近過去の近未来デザイン——千里丘陵の空間から考える——」『社会文化研究』第12号、晃洋書房、2010年3月、所収。
- 19) 濱田琢司「大日本窯業協会・工政会の倉橋藤治郎と胎動期の民芸運動」『アカデミア 人文社会科学編』91号、南山大学、2010年。なお、藤田治彦「民芸運動と建築」（『民芸運動と建築』淡交社、平成22年12月、所収）にも倉橋藤治郎についての記述がある。

- 20) 「限界集落」という用語の安易な使用に対しては、小田切徳美『農山村再生』岩波ブックレット、2009年、46頁以下、および小田切徳美『農山村は消滅しない』岩波新書、2014年、第I章、がある。
- 21) ここで紹介した手織りの作者は二人とも、倉敷民藝館の外村吉之介のところで織を習った人である。
- 22) 枚方の香里団地における保育所設立の市民運動については、和田悠「ジェンダー視点から戦後保育所づくり運動史を問う——1960年代の大阪府枚方市香里団地を事例に——」『日本オーラル・ヒストリー研究』第7号、2011年9月、参照。香里団地は戦後日本の本格的な団地の最初期のものである。
- 23) 参考として、関西の主な大規模ニュータウン（以下NTと略す）を、街開きの年とともに挙げておく。
1. 千里NT（大阪府吹田、豊中市、1962年）、2. 泉北NT（大阪府堺、和泉市、1967年）、3. 須磨NT（神戸市須磨区、1967年）、4. 林間田園都市（和歌山県橋本市、1980年）、5. 神戸三田国際公園都市（神戸市北区、三田市、1981年）、6. 西神NT（神戸市西区、1982年）、7. けいはんな学研都市（「関西文化学術研究都市」京都府京田辺、木津川市、精華町、大阪府枚方、四条畷市、奈良市、1989年）、8. トリヴェール和泉（「和泉中央丘陵」、大阪府和泉市、1992年）、9. 彩都（「国際文化公園都市」大阪府茨木、箕面市、2004年）、10. 箕面森町（「水と緑の健康都市」大阪府箕面市、2007年）
- （参考）1970年、大阪万博。北大阪急行開業。1971年、東京・多摩NT街開き。泉北高速鉄道開業。1982年、泉北NT、人口15万人突破。
- 2010年の時点での高齢化率は、泉北NT約25%、千里NT約30%であった。
- 先に言及した香里団地（1958年入居開始）も「ニュータウン」と呼ばれた。
- 千里ニュータウン、泉北ニュータウンと大阪のターミナル（梅田、難波）へは「高速」鉄道で結ばれた。北大阪「急行」、泉北「高速」鉄道というネーミングに着目すれば、まだIT技術の発展はなく、情報で距離を飛び越えるのではなく、物理的な「速度」で空間を縮めようとする志向がそこには働いていた。
- 24) 「サークル」という言葉は、1931（昭和6）年に蔵原惟人が『ナップ』の機関誌にロシアでの用語例に倣い「芸術サークル」を提唱し、その後「サークル」という用語が一般化した、とされている。ただしこの場合のサークルはプロレタリアートの党、組合の影響を労働者の間に拡大し、労働者を動員するための補助機関とされており、今日の「サークル」の意味の使用法とは異なる。鶴見俊輔「なぜサークルを研究するか」、伊藤登志夫「サークル前史への試み」、共に『共同研究 集団』思想の科学研究会編、平凡社、1976年、所収、参照。なお「サークル」に相当するロシア語はкруг、кружокである。また日本語の意味で現在使用している「サークル」と英語のcircleとは必ずしも同じではない。
- 25) 隈研吾『10宅論』ちくま文庫、1990年、203頁。